

---

# **光射す方へ・・・【東方小説】**

御音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光射す方へ・・・【東方小説】

### 【NZコード】

N1976BA

### 【作者名】

御音

### 【あらすじ】

一期一会を大切にする大学生、田口啓祐。  
人の出会いは時に華麗、時に残酷。  
その人の人生を大きく変えることもある。  
共に辛い思いをし、共に惹かれ合う。  
全ての始まりは出会い、今ここに人生の始まりが訪れる。

## 第一話 「一期一会」

人との出会いは一期一会。

あなたと出会えたのも奇跡かもしだれ、実は運命だったのかもしない。

ただ、これだけは言える。

”あなたと出会えて本当に良かった”と・・・

カーテンから差し込む光、部屋中に鳴り響くアラームの音。

小鳥の囀り・・・は流石に無いか・・・

俺は寝不足で疲れ切った体をゆっくりと起こす。

誰もいない殺風景な部屋、真ん中に机がポツリと置かれている。このアパートには部屋が3つあり、リビング兼寝室と物置、そして空き部屋にしている。

ブー、ブー・・・

机に置いてある携帯が鳴り響く。

俺は背中に思い齿でも背負っているかのような速度で携帯を手に取つた。

一つ折りの携帯を開き、その画面に表示されている項目に目をやる。

”おはよう諸君！本日も朝から晴天で気持ちが良いな！”

今日は特別講義があるらしい、各自筆記用具とメモを取れる物を用意することだそ�だ！

といつことで俺は支度をしなければな。また大学で会おう。”

見るなり神速の如く携帯を閉じる。

相変わらずのテンションはメールにまで及んでいるらしい。そう思いつつもこういうお知らせには感謝している。俺は普段からメモを取らないからな。

ベッドから降り洗面所へ向かう。

青色の歯ブラシを手に取り歯を磨く。

当たり前のことだがそれでいい。

「…………眠い」

歯を磨き終え俺はポソリと呟く。

言つたところで眠気が覚めるわけではないのだが、寒いときに寒いと言つてしまふようなものだ。

寝癖をドライヤーで整え、今日着ていく服をタンスからあさる。

「これは昨日と似てるし……これは、んー……」

大したセンスも無いのに悩みに悩む。

結局選んだのは無難な感じのだった。

それを急いで着込み、大学へ持っていく物をカバンに入れ始める。

朝ご飯は食べない……そもそも食べている時間が残されていない。支度を済ませ、玄関に放りっぱなしの靴を急いで履く。

「…………行つてきます」

電車を乗り継いで大学前に到着する。

朝の通勤、通学ラッシュ時ほど電車が地獄に思えることはないだろう。

服のシワを軽く伸ばしながら大学へ歩く。  
見知った顔もあれば見知らぬ顔もある。  
当然だろう、今はまだ5月。

一ヶ月で新入生全員の顔を覚えるほど俺には記憶力は無い。

「あの子は あの子は。あんこは・・・って、あんこってなんだ？」

隣でふつぶつと呟く馬鹿は無視するのが一番だと知っている。  
俺は大学の方を向きながら静かに足を進める。

「俺の心は真っ黒なのに空は青い・・・その清々しさを少しは分けてくれよ・・・」

「なら分けてあげよつか？」

後ろからひょっこりと声をかけられる。

河野美佐子、中学までと大学からの同級生だ。

未だに後ろでブツブツ呟いている馬鹿と3人でよく遊ぶ仲間だ。

「今日も馬鹿は平常運転なの？」

見ての通りだとジエスチャーで示す。

ただ指で指すだけで分かつてくれるほど日常的な風景と化したのだろづ。

馬鹿は放つておき、俺は美佐子と2人で大学へ向かうこととした。こうして誰かと共にいるということは良いものだ。

1人ほど辛くて孤独なものはないからな・・・

「ほら、また暗い顔してる」

美佐子に言われて自ら頬を抓つてみる。  
確かに暗い顔をしていたのかもしれない・・・でも仕方がないことなんだ。

俺は深く深呼吸をし、ふつと体に力を入れた。

「うん、それでこそ啓祐だね！やつぱりしゃつきつとしてる方が良いと思ひよ」

こづして話せる相手がいることに感謝したい。

俺の座右の目は一期一會。人との出会い、関わりは一瞬たりとも大事にしようと心がけている。

「もうすぐ着くよー先行ってるねー！」

そう言つて走つていく美佐子。

俺はその後ろ姿をボーと眺めつつ、トボトボと大学へ歩み始める。

この大学に入学して早2年が経つ。

最初こそ不安で押し潰されそうだったが、今の生活を送っているのは美佐子と慶一のおかげと言つても過言では無い。

人の出会いは大切、そして出会えた人に感謝。

俺は少しだけ顔を上げ、大学の門をくぐった。

ここは田の光が届かない地底。

地上から深く深く、まるで避けられる、避けているかのようにでき  
た街。

地底の繁華街、そして地靈殿。

妖怪ですら恐れる少女、その妹。

八咫鳥、猫耳の妖怪。

数々の人間とは違った生き物が住む世界、幻想郷。

「でねでね、あの巫女がそんなことをしてたの」

白髪の少女が紫髪の少女に楽しそうに話しかける。  
それを横目で聞く紫髪の少女。

回りには数々のペットがわいわいと騒いでいる。

ここが元地獄だなんて誰が思うだろうか。

少なくとも過去を知らない人物はそうは思わないだろう。

「・・・ここし、少し出掛けのから留守番宜しくね

「出掛けの?..?」

ここじと呼ばれる少女はまるで子供のよつに行先を訪ねる。  
紫髪の少女はそれを軽くあしらい、スウと部屋を出て行つて  
しまつた。

「う、まるでモウ戻つてこないかのよ！」

「「こし様、れとつ様はどうひらく？」

「分からない。お姉ちゃん何も教えてくれなかつたもん」

いじけた子供のようにソファーに寝そべる「こし」。

隣では猫耳の少女がちょこんと座つている。

火焰猫燐、地靈に住む妖怪。

その容姿から誰が妖怪と思うだらうか？しかし妖怪といつて同じに変わりはない。

「せとり様帰つてくるのでしょ、つかね？」

お燐は首を傾げながら呟いた。

彼女も薄々気になつてゐるのだろう、せとりはもう帰つてこないのではないかと。

「いしだつて気になつてないわけではない。

「帰つてこな」ときはその時だよ。あいつが現れたらそれだけの事態つてこともね」

特別講義だからと期待していたのが馬鹿だった。

大した内容でもなく、自分が思う将来にはとても役立つとは思えな

かつた。

それでもメモは取らなければならない。レポートという地獄が待つているのだから。

「だるいつたらありやしねえぜ・・・啓祐、終わったらカラオケでも行かないか？」

慶一の誘いに断つたことは無い。  
俺のバイトのシフトに合わせて遊びに誘つてくれる優しい奴だからだ。

勿論、美佐子も誘つつもりなのだろう。  
いつも3人で遊び、3人で笑い合う。  
これほど楽しい人生が他にあるのだろうか？  
少なくとも俺はそんなものは知らない。

「うーん・・・悪いけど今日はバスするよ」

断つたことは無いのだが、今日だけは何となく乗り気じゃなかつた。  
慶一は「そうか」とだけ言い残し講義室を出て行つた。  
明日もバイトは休みなので明日にしようと俺は決めつけ、ノートを抱え講義室を出る。

今日の帰りは1人。そう、何となく決めたのが事の始まり。

慶一と美佐子に別れを告げ、俺は1人で帰路に就く。  
駅までの道のりを歩き、がやがやと鳴り響く商店街を通り過ぎる。  
運良く駅に着くとすぐに電車が到着した。

時間帯が少しずれているらしく、車内はガラッと空いていた。  
椅子の端に座り、乗り換える駅まで寝ることにした。  
少しだけ・・・少しだけ眠ることに・・・

(次は 駅へ、駅で御座います)

車内に響くアナウンスで目が覚める。  
どうやら目的の駅に着くらしい。

慌ててカバンを掴み、扉の前に移動する。  
扉が開けば外に出、向かいのホームで電車を待つ。  
毎日繰り返していれば間違えることは殆ど無い。  
電車が来るまで少しだけ時間がある。

ブー、ブー・・・

ポケットに入れてある携帯が震えだす。

誰だろうと携帯を出し、二つ折り状態の携帯を開いた。

画面には美佐子の文字、そう、大学の同級生河野美佐子からのメールだった。

”遊び断るなんて珍しいね

明日もバイト無いんでしょ？明日は3人で遊ぼうね”

ありがとうだけ打ち込み返信する。

いちいち気を使ってメールを送ってくれるのだから無視は失礼だ。  
メールの文面を見ながら感謝しつつ、ホームに到着した電車に乗り

込む。

自宅まで後10分程度だろう・・・帰れば晩御飯の支度が待つている。

といつても冷凍食品を温めるだけなのだが・・・

電車を降りれば自宅までは後少し。

少しの道のりがとても長く感じるが、歩かなければ自宅に着けない。

仕方なくトボトボと足を進める。

カーブミラーの無い小さな交差点を過ぎ、自宅のアパートが見え始める。

アパートの前、トの交差点に差し掛かる。

俺は座右の目が一期一会だと言った。

一期一会とはとても大切で意味のある言葉だ。

それと同時に恐ろしいものもある。

人の出会いには必ずしも良いことばかりではない。

自分にとつて不都合な出会いもあるだろう。

それでも俺は一期一会を大切にし続ける。

そう、こうして何気に帰ってきた今も・・・

ドンッ！

誰かと体がぶつかる。

少しだけ顔を上げ、ぶつかった相手を視界に捉える。

これが全ての始まり、俺の人生を180度変える出来事の始まり。紫髪の少女との出会いでも会った。

「…………変…………ですか？」

彼女は「」う言い放った。俺は何も言つていないので。

「別に……変ではないですよ。むしろ……似合つてますよ」

何氣に言つたこの言葉が始まりだつた。

何に対して似合つていると言つたのかは定かではない、服装かもしないし髪型かもしねりない。

しかし、彼女には全てが簡抜けだつた。

俺が口から言わざとも全てを分かつており、言つ必要が無かつた。

「…………こぎなりで失礼なのは承知の上ですが……その……泊めてもらつてもよろしいでしょうか？」

人生が変わった瞬間だつた。

## 第一話 「事の始まり

大学での講義が終わり帰宅した。  
いつもと変わらぬ風景の部屋。

冷凍庫から晩飯用のお好み焼きを2つ取り出し、皿に乗せて温める。  
俺は普段から大食いではない。それでは何故2つも温めているのか。  
理由は簡単だ、部屋を見てもらえればすぐに分かる。

「（・・・・・）何が起こったのだろうな」

内心の俺はとても困惑している。

別に一人暮らしだから1人増えようがどうかことは無いのだが・  
・

部屋の中心、そこに置かれた机の前にチョコソンと座る紫髪の少女。  
どう見ても20歳にも満たない少女なのだが・  
・

「お好み焼きとは何でしようか・  
・

何も聞く前に聞かなくともと焦ってしまう。

この少女、名は古明地さとりと名乗った。

俺の思うことを俺自身が言う前に言われてしまつ。まるで俺の心を  
読んでいるかのようだ。

不思議を超えた不思議な少女だと俺は思う。

先ほどアパートの前の曲がり角でぶつかつた後、突如泊めてほしい  
と言ひ出した。

話しを聞く限りじゃ別世界らしき場所から來たらしい。

知り合いなどいるはずもなく、たまたま居合わせたのが俺だったの  
で俺に頼んだ、そちらしい。

本当かどうかはさて置き、流石に幼い少女を外に1人でいさせるわ

けにはいかない。

変な誤解をされては困るが、そこまで鬼だとは自分では思つてないつもりだ。

「大阪の名物ですか……一度食べてみたいですね……」

答える必要が無いのはとても楽なのが……少し怖いぐらいだ。

彼女、古明地さとりは何でも先に口走る。

俺の考え、思考、全てを読み取り全てを悟つてている。

そう、悟り。

「…………さとりさん、だけか」

「はい。古明地さとりです」

こうして稀に会話が成り立つ時もあつたりする。

彼女に対していくつもの……口が暮れても終わらぬほど質問があると思う。

全部をぶつけていては時間が足りない、それに彼女にも失礼だらう。俺は手短に、しかし重要な部分だけを再度質問として聞くことにした。

「まずはその幻想郷といつ場所について知りたいかな」

彼女が言つには幻想郷は近くて遠い世界らしい。

らしいというのはやはり俺自身が完全に信じていなかから。

見たことも聞いたこともない世界から来たなんて誰も信じないだろう。

そしてその世界には人間以外の生物、妖怪や吸血鬼、果ては神まで存在するらしい。

本当に幻想郷が存在するならば、これほどの世界を搖るがす事象は無いだろうな。

「そして私は幻想郷、その地底にある地靈殿という場所に住んでいました。こうして外界にいる原因は分かりませんが・・・」

さとうはそう説明する。ぎこちなく。

喋り方 자체にはまったく問題は無い、むしろ丁重かつ親切な説明だと思う。

ただ、視線がチラチラと移動している。定まっていない。まるで緊張している、オドオドしているかのようだ。

「それと、さとうさん自身についてなんだけど・・・」

ビクッときのりの体が震える。

まるで怖がるように、トラウマが蘇っているかのように。その目は極限にまで潤んでおり、今にも涙の粒が零れそうな脆い瞳。変わった人だなと思いつつ、俺は2つ目の質問を投げかけた。

「とりあえず年齢だけ教えてもらつていいかな?失礼なのは分かってるけど知つておかないと色々と大変なんですか」

「ね、・・・年齢ですか・・・」

拍子抜けしたような表情でこちらを見据えるさとう。

やつとのことで視線が合つたと思えば、今度は困った表情をする。感情が顔に出る人なのだろうか・・・

「年齢は・・・その・・・」

実は童顔で20歳を超えているから言つのが恥ずかしいのか。

それとも女性として年齢を暴露するのが恥ずかしいのか・・・

何れにしてもこれ以上聞くのは心が痛んできた。

俺は困惑し、顔が紅潮しているさとりにこう言った。

「まあ年齢はいいよ。ごめんね、失礼なこと聞いちゃって」

そう言つて温めが終わつて冷めているであろうお好み焼きを再び温める。

これは俺の直感かもしだいが・・・さとりは人と関わるのが苦手なのかもしれない。

それ以前に、幻想郷がどういう場所なのか俺には分からぬ。  
もしかしたらさとりは妖怪に囲まれて過ごしていたのかもしれない。  
少なくとも彼女は人間なのだろうが・・・

時は数時間進んだのだろう。

外は既に街灯の明かりのみとなつていた。

まだ季節が春なので虫もそういうわけもなく、心地良い夜風が網戸から入り込んでくる。

部屋にはテレビから流れる音声が響いており、そのテレビに釘付けになるさとりもいる。

普段は俺以外いないこの部屋に誰かがいるといつのはとても違和感がある。

かといつて追い出すというわけでもない。何もしないならいてもらつても構わない。

・・・馬鹿を泊めたら色々とされそうで嫌なのだが。

「（…………不思議といえば不思議なんだけどな…………）」

彼女は何かを隠している。

その隠し事が何かは分からぬ、ただ何かを隠しているのは事実だろづ。

オドオドとした雰囲気がそれを物語つてゐるし、まるで人と関わるのを避けるかのような感じもそうだ。

彼女は人が嫌いなのだろうか……俺には分からぬが。

「さとりさん」

「は、はい・・・何でしようか・・・」

この反応、驚いているというよりかは怖がつてゐるようだ。  
考へても埒は明かないのとおりあえず流すことにする。

「何か困つたことがあつたら言つてね。俺も出来ることはするから」

会つて半日すら経つていない相手に何故ここまで優しく接するのか。  
単なる社交辞令なのかもしけれない。

それか・・・俺の過去のせいなのかもしけれない。

とにかく、さとりがいる間は不自由をしないようにしなければ。

「ありがとうございます・・・」

不器用な笑みがほんの僅かだ漏れる。

まるで頬の筋肉が引き攣つたような笑みだったが、本人なりに頑張つたのかもしれない。

それに・・・何だか嬉しい。

「どうあえずひとつわんの寝る部屋だけだ……ほか部屋が一つあるんだ。ナニコレのベッド持つていくからヤバいでいいかな？」

「え、あ……でも……あなたのベッドじゅ……」

オドオドするわどつだが、俺は強引に話しを進める。  
とつあえずベッドは持つていくことにした。押し入れに布団がある  
からベッドが無くても寝れる。

問題は服やその他もうもろだ。

俺は男、ましてや女性とお付き合いなんてしたことがない。

美佐子は友達だし、慶一は論外に等しい。

「んー……そうだ

俺は閃いたように頷く。  
しかし、出会って間もない彼女と買い物に行くなんていいのだろうか。

彼女は人との関わりを極端に嫌っているみたいだし……  
とつあえず聞くだけ聞いてみることにした。

「明日講義が終わったらさ、わどつさんの服とか日用品を買いに行  
うつと思つんだ。どうかな?」

お金についてはあまり追及してほしくない。いちいち気にしてもう  
つてでは埒が明かないからな。  
さどつは困った表情をするも、無くてはならない物もあるのだらう。  
僅かだが首を縦に「クリと振つてくれた。

「うん。じゃあ明日の夕方は近くのデパートにでも行こうか

そう言つて俺は折りたたみの出来るベッドを部屋から部屋へと運び始める。

キヤスターがついているので移動はとても楽で便利だ。  
さとりはベッドを運ぶ俺をじつと見つめ、視線を合わせようとするとフイツと逸らしてしまつ。

人が嫌いなのか、恥ずかしがり屋なのか・・・よく分からない。

アパート前の道は街灯と月明かりで照らされている。  
網戸から入り込む夜風に当たりつつ、俺は缶チューハイの蓋を開けた。

静かになつた室内で1人酒を飲む。

「・・・・・はあ」

何だか疲れた一日だつた。

どこから来たのかも分からない少女、古明地さとり。  
急に泊めてと言わたときこそ驚いたが、今となつては自然になりつつある。まだ半日も経つてないが。  
人間の適応力にはつくづく驚かされる。

「これからどうなるんだろうな・・・」

誰も答えない、1人しかいないのだから。

そんな中でも呟いてしまう。やはり不安はある。

日本に住む以上、住民票や税など色々と面倒な部分がある。

さとりはそういう物には登録なんてしていいだろう。  
もし追及されたらどう答えたらいいか・・・まったく分からぬ。  
しかし、いちいち氣にしていては骨が折れる。

「いいよな別に・・・仕方ないもんな」

そう思いチューハイを一口、一口飲む。

度数の低いチューハイなので明日の講義には問題は無い。  
俺はそれを飲み干し、臨時で敷いた布団に身を包めた。  
そして静かに目を閉じる。

また明日がやつて来る。いつもと変わらぬ明日が・・・

## 第二話 「感情の意味」

薄暗い部屋の中、一人ベッドに横たわるセト。

妖怪には寝る必要がない、睡眠などとる必要がない。

彼女はこのまま寝なぐても生きられる。妖怪なのだから。

「（・・・理解、できません・・・）」

彼女は人間が大嫌いであり、人間も彼女を心底恐れている。自らの心を読む力いよつて人間はおろか、妖怪にまで恐れられるようになる。

私を好き好んでくれるのは動物達、そう、地靈のペットだけ。そう思つていた・・・

「（あの人間は・・・）」

少しだけ心を読むのをやめてみた。

いつもなら心を読み、相手の思考を先に暴露することで脅かしたりしていた。

しかし、相手が何を言い出すのか分からなければ相応のスリルのうなものがある。

人間が嫌いといふこともあつて・・・

「（・・・・・明日が・・・楽しめます）」

人間との初めてであろう交流。

さとりの胸はまるで遠足前の子供のように高鳴っていた。

そう、体が火照り、顔が紅潮し・・・

それはまるで恋する乙女のよう。

しかし、さとり自身はそれに気づかない、分からない。この感情が後に残酷な未来を招くといふことも……。

朝田は容赦なく俺の体を襲う。

毎日のようすに眠い体を起こし、洗面所へ向かう。

朝、飯の良い匂いが漂つて、俺は眠い目を擦つて歯を磨あはじめ……

・・・・・

「（・・・良い匂い？）」

ふと疑問が頭に浮かぶ。

それと同時に、誰が何をしているのかある程度予測がつく。

俺は歯を磨き終え、すぐさま台所へ向かった。

湯気がもくもくと上がる白いほんに味噌汁。

ところどころ半熟のオムレツ、そして良い感じに焼けているソーセージ。

一体誰が作ったのだろうか。答えは一つしかない。

「えひり・・・さん？」

まじまじと口元と睨めっこをするたとり。

Hプロンこそつけていないが、その姿は初々しい夫婦の妻のよう。さとうに料理スキルがあったのかと感心し、早く食べてみたいという衝動に押されてしまう。

「あ、おはようございます・・・その・・・よかつたら、どうぞ・・・

・

よかつたらなんて勿体無い、俺はすぐさま箸を取り出した手料理を食べ始める。

朝ご飯なんて滅多に食べない。食べるといつてもパンかご飯だけだ。たまに早起きをしれみればこんなに美味しい朝ご飯が食べれるなんて・・・俺は何て幸せ者なのだろうか。

あまりの美味に俺は周りが見えなくなっていたのかもしれない。さとりさんがお茶を持ってくれたその時・・・

ガシャンツッ！・・・・・・・・・

足を滑らせたのか、お茶の入ったコップを盛大にまき散らすぞと。そして俺曰掛けて飛んでくる。

勿論、気付くのに数秒を要した俺に回避の余地など残されていたのだろうか・・・ない。

「つまつまっ！」

回避が出来ないなら受け止めるしかない。

俺は無理に体を捻りさとりを受け止めた。

受け止めた反動で椅子がひっくり返り、俺もさとりも床へ投げだされる。

「痛い・・・そして柔らかい・・・」

後頭部を床に強打したのか、じんじんと痛みが増してくる。そして右手、俺の右手が柔らかい物をふにっと掴んでいる。最初こそ理解できなかつたものの、徐々に何を掴んでいるのかが鮮明になつてくる。

と、同時に脳裏に危険の一文が浮かぶ。

冷や汗をかき、田を見開いたその時ツツー！

バシンツツー！！

「おはよつ。何だか今日顔色悪くない？」

となりで美佐子が話しかけてくる。

顔色が悪いも何も・・・左の頬を見てもらえれば全てが分かる。  
真っ赤に腫れ上がり、その腫れた後は誰かの右手のよう。

「夫婦喧嘩でもしたの？」

「誰が夫婦だ喧嘩だ・・・そりや俺だつて悪いわ。非は認める。でもあんなに思いつきり殴らなくてもさ・・・」

腫れ上がる左頬をさすりながら大学の門をくぐる。

今日はこれといって特別な講義もなく、いつも通りの講義だけだ。  
居残りすることもそこまではないだろう。

残ると言えば井上教授が面倒をみてくれるだろ？ナビ・・・

「じゃあね。私先に行くから」

そう言つて先に講義室へ向かう美佐子。

いつもの如く、その背中をボーと見つめていた。

後ろではこれまたいつも如く馬鹿がぶつぶつと咳き、そしてメアードを聞いては断られるの繰り返しだった。

・・・ 今日も平和な一日になりますよ!」。

講義が終われば俺は一直線に自宅へ向かう。  
美佐子と慶一には事前に断りを入れておいた。  
最近付き合いが悪いなどどうこう言つていたが、そこは何とか分か  
つてもうらうた。

俺は珍しい私用の為に帰路を急ぐ。

「つたぐ・・・何でこんな時に限つて電車は延着、しかも満員なん  
だよ・・・」

乗車率120%の電車に揺られよつやく自宅前まで辿り着く。  
部屋の明かりはまだついてこる・・・せとじは準備しているだらう  
か?

俺は慌てて階段を上りドアノブに手を差し伸べた。

「ただいま・・・れとつさん?」

返事がない。

そもそもただいまといふ単語を発したのが何年ぶりだらうか・・・  
靴を脱ぎ、室内をキヨロキヨロと见回す。  
誰もいない・・・するととある一室が頭に浮かぶ。  
まったくと黙つていいほど使っていなかつた空き部屋。  
今となつてはひとりの寝室。そこを覗くことこ・・・

「・・・・・・何と・・・・・」

スースーと寝息を立てた。いつの姿がそこにはあった。

疲れて寝てしまつたのだろうか……起きるべきか悩む。

とりあえず軽く体を揺さぶつてみた、が、起きる様子は全く無い。どうしようかと迷つてゐる最中、やとつがむ「」と何かを口にする。

何を言つてゐるのかは分からぬ。ただ、はつきりと聞き取れた部分だけある。

それを聞くなり俺の心中はショイクされたかのようにじぢぢやべぐやになる。

いや、俺だけじゃない、それに一番辛いのはせとつ自身だ。

「・・・あ・・・私寝ちゃつた・・・」

目が覚めるなり慌てて起き上がる。いつ。

突然起き上がつたせいで眩暈がしたのか、ふらつと体を揺らす。慌ててそれを受け止め、軽く背中をさすつてやる。

「す、すみません・・・お出かけの方は・・・」

「ん、ああ。行こうか。さとつさんは用意大丈夫?」

「クリと頷く。とつ。

俺は車のキーと家の鍵をポケットに入れ、靴を履く。

施錠を確認し、アパート裏に止めてある愛車の下へ急ぐ。

ここ数日乗つていなかつたせいか、少し埃を被つたような感じがあるが・・・

「これば・・・」

巨大な鉄の塊を前に啞然とするさとり。

話しによれば幻想郷は技術がかなり遅れているらしい。

車というものを見るのが初めてなら驚いても仕方がないだろう。

鍵のボタンを押し車の鍵を開ける。

助手席の扉を開け、こちらから乗つてくださいと説明をする。

恐る恐る乗り込むさとりを見て少しばかり笑みが零れてしまう。

「さてと、行こうか。」

キーを差し、エンジンを始動させる。

アクセルを踏み、軽快に鉄の塊は動き始めた。

目的地のデパートへと進みだす。

そう、もしかしたら初めての異性とのお出かけかもしない。

そう思ふと胸が高鳴るが、これはあくまでもさとうさんの買い物に付き合うだけ。

俺は何を考えているんだと頭を座席にぶつける。

「・・・何をしているのですか？」

「あ、いや・・・何でもないよ。デパートまで少しだけ時間かかるから。眠いなら寝てもいいよ」

信号が青になったと同時にアクセルを踏む。

車窓から流れる景色が珍しいのか、さとりはずつと外を向いたままだ。

俺はその姿が子供にしか見えず、またもや笑みを零してしまつ。我ながらこの状況を楽しんでいるのかもしれない。

そして、それと同時にこれが終わってほしくないという感情があつたのかもしれない。

視線を前に戻したさとりの手を無意識に掴んでしまう。

幼く華奢な手だが、人間独特の温かみを感じる。

思わずぎゅっと握ってしまう。

何をしているんだと自分に言い聞かせ手を離すが、温もりだけは逃げることはなかつた。

さとりは驚いた表情でこちらを見つめている。無理もないだらう。

「あつと・・・」、「めん」

青信号になつたと同時、慌てて謝る。

車内に気まずいのか、それとも困惑したものなのか、そんな空気が漂つている。

結局、デパートに着くまで終始無言状態だつた。

そう・・・懷いてはならない感情。

人間と妖怪の恋などあつてはならないこと。

さとりを妖怪と知らない啓祐には到底理解のできないこと。

「あの・・・」

デパートの駐車場に車を止め、横からさとりが話しかけてくる。  
とても困惑した表情、無理もないか・・・  
と、思つていた俺の推測は大きく外れた。

「あなたのこと、何と呼べばいいのでしようか・・・」

今思つたが、俺は自分の名前をさとりに教えていなかつた。

言われて初めて気付いたが、もし言わなければずっと名無しの状態でいくつもりだったのだろうか・・・

「あー・・・啓祐でも何でもいいよ」

「それじゃ・・・啓祐さん、で・・・」

顔を紅潮させるさとり。

それを横目で見つつ、シートベルトを外す。

デパートには仕事終えた父親と共に歩く家族連れ。まだ初々しい新婚夫婦。

様々な人達が集う中、俺とさとりも店内へ歩き出す。

春の夕日が差し込む中、丁度良い温度の店内に入る。デパートだけあって店舗の数はかなり多い。

えっと、ファッショングループは・・・4階か。

## 第四話 「禁断の恋」

結論から言おう……可愛この一言に死せる。

俺とさとうは4階にあるファッショントーナーへと足を運んでいた。様々な洋服店が並ぶ中、さとりが興味津々に見つめている店がある。可愛い子供服から大人っぽいクールな女性用の服が所狭しと並ぶ店。主に女性の服を扱っているらしい。

「・・・見るだけ見てみるか？」

不意に話しかけられ驚いたのか、さとうは体を大きく震わせた。しかし、それ以上に興味があつたのか、「クリと小さく頷いて店内へ入つていった。

それを見届けた俺は壁際に設置されていたベンチに腰をかける。普段こういう場所に訪れることが無く、慣れない場所に戸惑つているのが現状だ。

辺りをキヨロキヨロと見回しつつ小さくため息をつく。

さとうは店内でおすすめの服でも着させてもらつていいのかな？

「デパートか・・・」

小さくボソリと呟く。

デパートと言えば家族連れが目立つのが普通だろう。

現に俺の目の前を家族連れが数多く通り過ぎている。

お菓子を強請る子供、あれやこれを見て回る婦人。しかし、これだけは言える。皆が楽しそうだと。

「あ、啓祐……わん……」

ボーとしている俺に声をかけるさとり。

店内物色が終わったのかと思い顔を上げてみた。  
そこにはあのフリルのついた服のさとりはいなく、ただただ可愛らしい少女がいた。

色合いこそ元着た服と同じだが、少しアレンジを加えるだけで印象はガラッと変わってしまう。

思わず見惚れる俺に店員が声をかける。

「とてもお似合いでありますか?」

「え、ああ・・・いや・・・うん、似合つてる・・・」

不器用に返事をし、店員は一〇二〇と店内へ戻つていく。  
さとりはこの先どうしたらいいのか分からず困惑しているようだが・  
・

「・・・その服買つか?」

その一言に「クンと頷いた。

買つと決まれば服を着替え、レジへ持つしていく。  
会計を済ませれば服を丁重に紙袋に入れてもらひ。  
値段なんて気にしなくていい。そもそもひとつのみでいた世界と  
ここでは通貨が違うらしいからな。

「よかつたな・・・似合つ服見つかって」

さとりは顔を俯けたまま・・・ただ紅潮させた顔を見られたくないだけなのか分からないが。

次に向かったのは日用品コーナー。

普通に必要な物ととして洗面用具など買わなければならぬ。

「やわらかめでいいかな？」

「はい・・・一番柔らかいので・・・」

「どこかわからないがやわらかめと表示された歯ブラシをカゴに入れる。

歯磨き粉にタオルや切れかけのシャンプーなど・・・会計を済まし、ついでファッショングループへ舞い戻る。

「寝間着、いるよね？」

そつ言つてまた先ほどと同じ店内に入る。

寝間着と言つてもスウェットやジヤージみたいなものだが。

そういう類の服が並べられている場所へ移動し、その中から似合いくそなものを選んでみる。

さとりも自分で選んでいるようだが中々定まらないらしい。無理も無い、俺も人の事を言えないが慣れない場所ではどうしても躊躇してしまう。

「んー・・・また店員さんに選んでもらひ?」

「クリと頷いたさとりを確認し、どこかにいるであろう店員を呼びに行く。

そして俺は再びベンチへ・・・このベンチが何となく落ち着く。

真横にあつた自販機でコーヒーを買い暇つぶとして飲み始める。買い物とはこれほどまでに楽しいものだつただろうか。

少なくとも俺の記憶にそんなものはない。

無くて当たり前だろう・・・

そんなネガティブな思考を何とか跳ね除け、再びこちらへやつて来たさとりを見て見惚れてしまうのであつた。

デパートでの買い物を終え自宅に帰つてきた。

外は既に日が暮れ、街灯と月明かりに照らされるのみとなつた。

晩御飯は珍しく冷凍食品から脱した。

デパートの食品売り場で安売りしていた鶏肉を買い占め、今現在から揚げとして調理している。

熱した油の中に投入すれば後は上がるのを待ちつつクルクルと肉を混ぜればいい。

「から揚げって言つんですよね？」

「うん。美味しいよきっと」

自らの料理に自らが美味しいと言つのは少々抵抗があるが、これはあくまでもから揚げが美味しいという意味だ。

少しの時を過ごし、カラッと揚がつたから揚げをペーパーを敷いた皿に乗せていく。

無駄な脂が徐々に吸い取られていく。これを吸い取らないまま吃べるのは流石に無理がある。

「それじゃ食べよっか

机にから揚げ、白ご飯と並べていく。

今日買つたばかりの箸を握るひとりの姿は本当に子供ものよつだ。  
そして向かい合わせに座り、

「「いただきます」」

の合図で食べ始めた。

一口食べ、我ながらいい出来だと舌鼓を打つた。

晩御飯を食べ終え、隣り合わせに座りながらテレビを見ている。  
お笑い芸人が持ちネタを披露する番組なのだが、正直大半がごり押しのようであつまらない。

中には心底笑わせてくれる芸人もいるのだが・・・

「あ、・・・少し席を離れますね」

そう言つて奥へ行くをとつ。

俺は大して気に留めずにテレビを見ていた。

つまらない芸人がつまらない芸を披露する・・・これも世の理なのだろうか・・・

「あ、おかえり」

数分して戻つてきたさとうは隣にひょいんと座る。

トイレにては早かつたし、手でも洗つてきたのだろ。先ほどと同じように隣り合わせに座りながらテレビを見る。同じようにならぬのが・・・どこか違う。そつ、服装ががらつと変わつていた。

「着替えたの？」

と、聞えれば、

「はい・・・寝るときに着る物なので・・・」

と、返事が返つてくれる。

あまりに似合つ過ぎてこの為に田が合わせ辛い。

可愛いと面と向かつて言ふのはだが、生憎俺にそんな度胸と根性は無かつた。

「その・・・似合つて、ますか・・・？」

そのきつひなこ質問に一枚上回るきつひなさで答えた。

「・・・似合つて・・・んじゃないかな。つん・・・こと思つよ」

あいづなさが場の空氣を余計にきつひなくしてしまつ。決して重苦しいわけではないが、どこか固い空氣だつた。まだ出来つて2日目、お互にのじともよく分かつていない。ましてやせとりはどこの世界の住人かも定かではない。そんな相手に早くも心を許してしまつてゐる自分がここに立つてゐる。過去の経験と辛さ・・・

それらが連なり、そして今の状況がとても楽しく嬉しい。

誰かの温もりがあり、こうして誰かと一緒にいる。  
これが俺の思い描いていた人生なのかも知れない。  
人の温もりを感じ、幸せに生きたい。

「さとり、さん・・・・・・・・

もし、もしもの話だ。

さとりと共に人生を歩んだとすれば?  
まだ出会って間もないが、俺は完全に心を許してしまっているのか  
もしけない。

おかしい、早過ぎると思う人が大多数だと思う。  
それでも、それでも・・・

「さとりさん!」

俺の叫びに驚くさとり。

そして、こちらを少し見据えるなり顔を赤め俯いてしまう。  
何かを悟ったのだろうか・・・いや、それでもいい。

俺は、一世一代の決断を下す。

「さとりさん、俺は・・・・・あなたがす

時が止まつたような気がした。

まさかこんなことになるとは思わなかつた。

テレビの音なんて既に上の空。

俺は目を見開いたまま動かさない・・・いや、動かせない。

閉じられた綺麗な瞳、ほのかに香る甘い匂い。

ふにつけとした柔らかい感触、生温かい綺麗な唇。

誰がこんな幸せを想像しただろつか。

俺でさえ想像しなかつた。

「ん・・・ふはつ・・・・・・」

まるでここは一次元なのか、そんな風にまで思わされる。  
俺とさとりの口が唾液のアーチを描く。

何が起こった、そして何をした？

さとりとキスをした？それ以外に何をしたというのだ。

「・・・私の気持ちです。あなたが・・・啓祐さんが悪いのですよ・・・」

上田遣いでその言葉は反則だと心の中で叫ぶ。

まさか、まさか会つて2日でこうなると誰が予測した。

ぽつかりと空いていた俺の心に何かが埋まつた、そんな気がした。

空いていた1ピースを埋めるかのように・・・

「私はいつまでもこちらにいるか分かりません・・・けれど、ずっと・・・優しいあなたの傍にいたいです・・・」

遙か上空。

月明かりに照らされたその姿は月下美人。そのまま理解してもらえ  
ればありがたい。

優雅に舞う金髪の女性、夜に似合わぬ口傘をクルクルと回す。

「・・・あなたは大きな嘘をつき、そして大きな過ちを犯している

誰もいない遙か上空で1人呟く。  
田口啓祐の自宅を凝視しながら。

「人間と妖怪の恋など・・・認められないわ」

それは古くからの継。

人間と妖怪が共存する為のパワーバランス。

それが崩される恐れがある。2人の禁断の恋。

「あなたは・・・全てを敵に回すつもりなのかしら・・・それを分かつてているのでしょうかね」

女性の表情には美しいという文字は似合わない。  
呆れ、怒り、理解に苦しむという表情。

「幻想郷を潰す者は許さないわ。どんな手を使ってでもあなたを元に戻す。抵抗するならば・・・殺す」

## 第五話 「旅行」

あれからと、いつもの、俺の気持ちは浮かれたままだ。  
美佐子の声も口くに耳に入らず、慶一のよろな扱いになつてきたようにも思ひ。

それでもいいかと思つてしまつほど俺の気持ちは高ぶつていた。  
今日の講義が終われば明日から2日間大学に行く必要が無い。  
幸いバイトのシフトも入つておらず、俺はさとりにある提案を持ちかけてみた。

これは昨夜の出来事だ。

「旅行・・・ですか？」

一冊の雑誌を机に置きさとりに持ちかけてみた。  
季節は5月、6月を通り過ぎて7月。  
海が恋しくなる夏の到来だ。

「こここの旅館の飯が凄く美味しいんだ。夜の眺めも最高だし・・・  
2人で行こう?」

まるで新婚夫婦のような衝動に揺さぶられる。  
パンフレットには折り田や付箋は無い、まさにこの旅館だけに絞つていたかのように。

それもその筈だ。この旅館は去年美佐子と慶一と3人で泊まりに行つた場所。

「ご飯も美味しい眺めも最高、そして女将さんの談話も腹が引つくり返るほど楽しい。

これ以上に良い旅館なんてあるわけがないだろうと断言出来るほどだった。

「2人で旅行・・・その・・・私・・・」

顔を赤めながら俯くさとり。

そんなさとりとは対照的にウキウキ気分の俺がここにいる。パンフレットを丸めて何となくブンブン振つてしまつのはよく分からぬいが。

「・・・・・啓祐さんとなら・・・はい、行きたいです・・・」

これぞと言わんばかりに舞い上がる俺をじつと凝視するさとり。無理も無い、こうして異性と旅行に行くなんて誰でも喜ぶことだ。ましてや俺だ。友達以上の人と旅行に行くのは初めてかもしない。いつもはさとりに子どものように言つているが、今だけは俺の方が断然子供のようだった。

「それじゃ明後日から行こう!-予約すぐに入れるからさー!-予約予約!-」

電話の子機を手に取り雑誌に書かれてある番号に掛ける。

電話の主の声は聞き覚えのある声。

受付の人は去年と同じで変わっていないらしい。

「・・・はい、はい。明後日の頃に・・・はい、はい!-」

少しの確認を交え電話は終わる。

運良く部屋はまだ空いていたらしい。

「楽しみだな・・・楽しみだなおい!—」

「そんなにはしゃぐと怪我しますよ・・・」

呆れ顔のさとりだが内心は喜んでいるに違いない。  
俺には読心術なんてものは無いのだが・・・  
さとりにだってあるわけがないだろう。人間に入る心を完全に読む  
なんて不可能なのだから。

「・・・・・」

さとりが唇を固く閉じる。

俺のはしゃぎっぷりに呆れてしまったのだろうか。

流石にはしゃぎ過ぎたと自重し、床に静かに座り込んだ。

そんあことことがあって今は帰りの電車に乗っている。

美佐子と何通かメールのやり取りをし、明日から旅行に行くと云々

た。

”1人？”と聞かれたので”2人”と答えておいた。

”誰？”と聞かれたが”内緒”と答えておいた。

すると”そつか”と素つ気ない返事とともにメールのやり取りは終わった。

電車は目的の駅に到着し、俺は足早にホームを出た。

自宅までの道のりがこんなに楽しいと感じたことはあつただろうか。

無い、絶対無い。

「（とりあえず服と日用品と・・・あ、水着買いに行かないとな・・・）

帰つたらデパートに行こう。

さとりの水着を買わないと・・・  
といつても俺は単なる付添いで、売り場に入るほどの度胸は無いの  
だが・・・  
いや、そもそも入ること自体間違っているのかも知れないな。  
時には根性無しが役立つ時もあるらしい。

「と、家か・・・」

危づく通り過ぎた自宅の階段を上る。  
鍵のかかったノブに鍵を差し、ノブを捻る。  
当たり前の動作で開いた扉の中へ声を発する。

「ただいま！」

誰も返事などしてくれないと思つていた  
でも、今は違つた。

「おかえりなさい・・・啓祐さん

紫髪の少女が出迎えてくれる。  
まさに新婚の夫婦のようだが、これでも出合つてまだ2か月程度し  
か経つていない。  
我ながら早くに馴染め、心を開けたと思つ。  
・・・もしかしたらお互に境遇が似ているのかも知れない。

お互に辛い思いをしてきたのかもしれない、だからすぐに心を開くことが出来たのかもしれない。

「そりそり、海に行くのだから水着買おう?」  
「アパート行こう!」

「み、水着ですか・・・・・・」

そわそわしながらも口クリと頷いてくれるさとり。

そうと決まれば早速出掛ける支度を済ませる。

俺は車のキーを棚から取り出し、免許書と財布をポケットに突っ込んだ。

さとりはそこまで手荷物は無い。

とりあえず外出用の服に着替え・・・・あ、勿論俺は退室。

そしてアパート裏の愛車の下へ直行したのであった。

平日ともあって人は少ない方だと思つ。

入り口付近に車を止め、少しば見慣れたデパートの中へ足を運ぶ。

同じ4階のファッショントーナーでも場所が違う。

服とは別に、夏になれば繁盛する水着のコーナーへ。

俺はいつものベンチに腰をかけさとりを待つことにした。

隣の自販機で缶コーヒーを買って。

「(・・・俺の水着ってあつたっけか)」「

押し入れのどこかに詰め込んだような記憶があるようで無い。  
まあいいだろう、帰つて探せばそれでいい。

今はせとつの水着が決まるのを待つだけだ。

「（やとつせんといえば紫かな……でもたまには別の色もいいかな……）

俺の脳内で繰り広げられるファッショントリオは変態以外の何者でもなかった。

そんなことを繰り返しながら早30分。

一つの白い紙袋を下げたさとりが戻ってきた。

「良いの決まった？」

「は、はい・・・・・・店員さんのおすすめのですが・・・」

普通ならここで見せてと声をきなのだが、楽しみは後に取つておきたい。  
紙袋をまじまじと見つめつつ、駐車場に止めてある愛車の下へ戻ることにした。

日が暮れはじめ、徐々に月明かりが姿を現す時間帯。

ここで俺はつまらないことを思つづく。

「晩御飯さ、どこか外で食べない？」

家族連れが集まるファミリーレストラン、略してファミレス。

その一角の席に座る俺とせとつ。

慣れない場所に戸惑つたりとメイドーと睨めつける俺。

ファミレスは美佐子と慶一の3人で何度か来たことがある。無論、ドリンクバーと何か軽い物を注文するだけだが……いつもしてご飯として来店するのは初めてかもしない。

「やっぱステーキ辺りがいいよな……サーロインか……うん、これでいいや」

自分の注文する品を決め、後はさとりを待つだけだ。俺以上にメニューと睨めっこを繰り広げるさとり。相変わらず子供のようだ。

俺はそれをじっと、しかし楽しげに見つめていた。

「……メニューが多過ぎて決められません……」

といふことじゅうじいので俺が決めることになった。

さとりが好きそうなもの……よく分からぬのが本音だが……がつつき系の肉はあまり好きそうじゃない、だとすれば軽い食べ物だろうか。

かといつても軽い食べ物って具体的になんだろう?

そういうして迷つてゐるうちに時は進んでいつてしまつ。

結局、さとりは田玉焼きの乗つたハンバーグというものをしたらしい。

注文ボタンを押し、やって来た店員に注文するメニューを……

「……サーロインステーキと田玉焼きハンバーグを一つづ

「

「無反応!/?流石にへこむだ」

店員なのだからしつかりしようと渴を入れてやりたくなる。ファミレスの制服に身を包んだ慶一がそこにいた。笑いたくなつてしまつ。

「さては彼女か？それとも新づ

俺の物凄い形相に慶一は言葉を詰まらせる。

怖いのか、それともこれ以上いくと後々面倒だからなのか分からな  
いが。

とりあえず注文する品を前に渡す。

「・・・ま、旅行楽しんできなよ。お前にひとつちや初めてのような  
もんだる」

こいつのじゅうじゅうには本当に感謝する。

親友つていいものだ、普段は馬鹿言ひ合つてもこざといつときは助  
け合えるのだから。

「サーロインステーキと玉玉焼きハンバーグね。すぐに持つてくる  
わ」

そつ言つて厨房に入る慶一。

れど今はぽかんとした表情で俺の方を向いている。

「俺の親友の緒方慶一。馬鹿な奴だけど根は良い奴なんだ」

「親友・・・ですか」

さとつの胸にちょっとしたもやもやが溜まる。

そう、この時初めて味わった感覚。

もやもやが晴れずに溜まつていくような感じ。

初めての”嫉妬”

「せとじさん？どうかした？」

「あ、いえ・・・大丈夫です」

何も無いフリをしているのがバレバレだが、あえてそつとしておこう。

数分して注文した品が運ばれてくる。無論、慶一の手によって。

「俺のお手製料理を召し上がる」

「嘘つけ」

馬鹿の冗談はさっと流し、運ばれてきた料理に舌鼓を打つ。  
さとりもハンバーグが気に入ったらしく次々に口へ運んでいく  
る。

さあ、帰つたら旅行の準備だ。

綺麗な海に似合わぬ惨劇の旅行へと・・・

## 第六話 「忍び寄る影」

車窓から見える景色は綺麗の一言に及ばぬ。

山が見え、海が見え・・・

向かい合わせに座りながら微笑みあう。

「・・・さとうさんの方が綺麗だなあ」

なんてねざとらしく言い漏らす。

するとさとうは顔を赤くして俯いてしまう。初々しい2人の姿は新婚夫婦そのもの。もつとも、夫婦にはまだまだ遠いのだが。

辿り着いたのはとある海水浴場・・・のすぐ側にある旅館。玄関口に置かれているボードには”田口御一行様”的文字が書かれている。

さとうの苗字は古明地なのだが、今は面倒なことを避けるために田口にしてある。

一応兄妹という関係のつもりだ。

「ようこそいらっしゃいました。田口様で宜しいですか？」

はいと一言答え中に入る。

去年と変わらぬ内装、まるで故郷に帰つて来たかのようだ。

「お部屋は103号室になります。お荷物はこひりでお運び致しますので、ひやくつお寛ぎくださいませ」

流石旅館の丁重な接客だなと思つ。

俺も一応接客業のバイトをしているが、正直にこれまでできているとは自分では到底思えない。

貰つた鍵を片手に自分たちの部屋を田指す。

103号室・・・そりゃ去年も同じ部屋だつたような気がする。女将さんが氣でも使つてくれたのだろうか・・・いや、それはないか。

「んーー…やっぱり落ち着くなこの旅館は」

持つてきてくれた荷物を端に置き、窓から海の方を眺める。昼過ぎの今は家族連れなどで大変賑わっていた。

俺達も少しだけ休憩すれば海に行くつもりだ。

「・・・変な匂いがしますね」

「畳の匂いじゃないかな?自宅には和室ないから初めてなんだね」

畳の匂いは独特の香りがある。

日本人に生まれた為か、俺は畳の匂いが大好きだ。  
今住んでるアパートに和室が無いのが残念だが。

「持つてきた缶チューハイ1本だけ飲んで海行こう!ー楽しみだなー」

そつと開封してかばんからチューハイを取り出す。

アルコール度数の低いやつを・・・酔つたら元も子もないからな。

照りつける太陽の日差しが眩しい。

パラソルを砂浜に差し、シートを敷けば簡単な休憩所の完成。

海の目の前、白い砂浜の上で体をほぐす運動にはいる。

「海に入るなら運動しないとな。・・・っと、いたたたたた！！」

ふくらはぎを伸ばして攣つていては説得力が無い。

運動不足丸出しだと恥ずかしさに浸される。

「大丈夫ですか・・・？」

手で抑えるふくらはぎがさとりの優しい手のひらで包み込まれる。  
まるで天使のよう・・・攣つた痛みはどこへ逃げたというのだろう  
か。

さとりはクスッと笑つてパラソルの下へ戻つていく。  
白いパークーを着たままで。

「さとりさんは海入らないの？」

「私は暑いのが苦手なので・・・」じじいのんびりさせてもらいます

と言つてパラソルの下にしゃがみ込む。

どこか怪しげな部分があるのだが・・・

今回ばかりは突つ込んでみることにしよう。

「さとりさんって・・・泳げないの？」

ビクッと体が震え、同時に顔を俯かせてしまつ。

図星だったのだろうか・・・よく分からないうが。

「・・・幻想郷には海が無いんです。泳げないとこうよりかは・・・  
その、怖いのです・・・」

そう言つたとおりに近づき、手を握る。

少々強引だが海の方へ引っ張つてこくこと。

戸惑つたとつだが、楽しさを知つてもうえれば怖いものなど無い筈だ。

「とつあえずパークー脱ぎなよ・・・脱げつてのりのも変だけどさ。  
・・・」

更に顔を赤めるあたりだが、ゆつくつと羽織つてゐるパークーを脱ぎ始めた。

徐々に露わになつたとつの体、それに纏わりつゝように着られた水着。

白色と桃色の水玉模様、腰のあたりにフリルがついてゐる。  
一言で言えば子供っぽいのだが、とつが着てしまえば口から出る言葉は似合つてゐる、可憐この一言。

「は、恥ずかしいから・・・じりじり見ないでください・・・」

とつに言つたとおりに返る。

じろじろ見ていた自分への羞恥と、とつへの少しばかりの謝罪を行ひ早速海に入る。

日光で火照つた体が海水によつてひんやりと冷まされていく。  
おどおどと海水に足を入れたとつだが、何も無いことを確認

してザブツと入水した。

入った勢いで海水が顔にかかり田をゴシゴシと吹いている。

「な、あ・・・」の水しおぱいです・・・

「海水には塩分が含まれているんだ。飲むとあれだから極力飲まないようにね」

そう言つて予め膨らませておいた浮き輪をさとりに渡す。

この上に乗るんだよと説明を加えればすぐに浮き輪に乗り出した。プカプカと浮かぶのが気に入つたのか、太陽に勝る笑みを浮かべてくれた。

・・・可愛い。

「ね、海つて面白いでしょ？」

俺の問い掛けに「はい、面白いです」と答えるやつ。浮き輪に乗つてプカプカと浮かぶさとりの隣でプカプカと浮かぶ俺。2人でじつと地平線の方を眺める。決して見えることのない海の先を。

「！」の海は幻想郷にまで続いているのでしょうかね・・・

「繋がつていいんじゃないかな。もしかしたら幻想郷のどこかに海があるかもしれないね」

水中で遊んだり、海の家で飲んだり食べたり、ピーチボールで遊んだり・・・

楽しいことだけの1日だつた。

日も暮れはじめ、青かった海は夕日でオレンジ色に染められている。これもまたとても綺麗なのが。

「あの・・・」

窓辺から海を眺めている俺にふと声をかけると、遊び疲れたのか、その顔には少しばかりの疲れが見えている。

「今日は・・・ありがとうございました」

そう言って俺の畳の前にひょここんと座る。

別に気になくていいよと言おうとしたのだが・・・それを言わせなかつた、許せなかつたのはせとりだつた。

「んふ・・・ん・・・・」

夕日を背中に舌を絡めるキス・・・

さとりつてこんなに積極的だつただろうか・・・

少なくとも会つた時はそうは思わなかつた。

むしろこんな関係になれるということと血体思つてもなかつた。それが実現しているのだから・・・もうビビりでもいいや。

「少しだけ・・・」いつかせてください・・・

そつとつて俺の胸に頭を乗せてくる。

海から上がつた際にシャワーを浴びたのだが、まだ乾ききつていなかつてしまつて濡れていた。

服が少し湿るのがどうでもいい。

その華奢な頭を優しく撫でる。

今のせとつはまるで甘えん坊の子猫のよつ。

とても愛おしく感じる。

「その・・・・・」

胸に頭を乗せながらさとつは呟く。

俺には読心術なんてあつたつけな・・・何を言ひ出すか分かつてしまいそうだ。

それでも静かにさとつの口から発われるのを待つ。

「好きです・・・・・啓祐さん・・・・」

夜風に靡く海の上、ポツカリと裂かれたそこにその女性はいた。  
旅館を静かに見据え、今にも何かをするぞと言わんばかりの表情。

「・・・・・もつ、十分でしょう」

差していた日傘を閉じ、砂浜へ静かに降り立つ。

中華風のドレスがふわっと舞い、女性から独特の甘い香りが漂つ。潮風に靡く金色の髪がとても美しく、月光に照らされ更に美しさを増す。

「私も強硬な手段は取りたくありません……出来れば穩便に済ませたいのですが……」

果たして彼らは私の要求を素直に呑み込んでくれるだらうか。  
いや、まず有り得ないだろう。  
必ず反抗する。素直に受け入れる筈がない。  
だとすればどうする？

「やむを得ない場合は……仕方がありません」

懐に忍ばせる3枚のカードに手をやる。  
スペルカード……幻想郷での武器のような物だ。

「幻想郷の為なら仕方がありませんわ。私は幻想郷を守る為ならどんな非情にだつてなりますもの」

ゆっくりとその歩みを進める。

彼と彼女の泊まる旅館へ……一步一步……  
それは何かのカウントダウンなのだろうか。  
彼らの仲を引き裂いてしまうのか……

「古明地さとり……戻つてもらいましょう」

## 第七話 「愛の意味、非情になり切れない妖怪」（前書き）

今回は不謹慎な表現が含まれています。

## 第七話 「愛の意味、非情になり切れない妖怪」

胸騒ぎがする。

別にどうしたこと無いのだが、どうも氣になつてしまつたがない。  
何か起つるんじゃないかと。

さとりが、消えそうな気がした・・・

海に照らされた朝日は田覚めには最高の代物だつた。

普段では味わえないような気持ちの良い田覚め、それにはもう一つ  
理由があるのだが・・・  
見てもうれば分かるよつこ、シャンプーのほのかな香りが俺の鼻を  
刺激する。

普段から香る甘い香りが気持ちを高鳴らせる。  
俺のすぐ横ですうすうと寝息を立てるさとり。

こんな状況で・・・どう寝ろと?

現実は一睡もしていなかつた。

寝起きなんて嘘、俺は一度も睡眠をとつていない・・・

「気持ちの良い朝だ・・・そして眠い・・・

矛盾した事を呟きつつ、もぞもぞと布団から身を出す。

甘い香りが漂はないのは残念だがいつまでも布団に潜つているわけ  
にはいかない。

朝食は8時からだけか・・・

時刻はまだ6時半、朝食まで暫く時間がある。

窓から朝日に照らされた海を眺めつつ、目覚めの一一杯を一人で乾杯した。

「…………今日で終わり、か

旅行は一泊二日だ。

今日の昼頃には旅館を出なければならないし、お土産をいくつか買って帰らなければならない。

こつしてさとりとゆづくじ過ぎますのも次の休日になるのだろうな……

「…………散歩でもするか」

室内には一切の物音すらしなかった。

ただ眠る少女の寝息だけが聞こえ、金髪の女性の足音だけが響き……

眠る少女を見るなり女性は悲しそうな表情を浮かべる。

本音を言えはこんなことはしたくない。

自ら他人の愛を引き裂くなど言語道断、それでもしなければならない。

何故なら、幻想郷を守る為ならどんな非情な“妖怪”にでもなるのだから。

「…………楽しかったでしょうね」

眠るをとつを前に一人呟く。

あの地靈の主が人間と笑い合うなんて誰が想像しただらうか。  
いや、誰も想像しない、考えもない。

人間はおろか、妖怪にすら恐れられたあの少女が心底笑う姿など・

「・・・・・別れはその者を強くする。あなたはより一層強くな  
りなさい」

それは妖怪としてのさとりに向けられたのか。  
はたまた、一人の少女に対しても向けられたのか・・・  
知る者は金髪の女性、八雲紫にしか分からぬだらう。  
幼く華奢な体を軽く持ち上げる。

丁寧に抱きかかるその姿はまるで王子とお姫様。  
しかし、これはあくまでも非情な出来事。

第三者によつて一つの愛が裂かれるのだから・・・

「後の事は私が承るわ。あの少年には私が

ダンダンダンダンと足音がする。

それはとても力強く、そして怒りが込められてゐるかのよう。

足音は段々と近づく、大きくなつていいく。

紫は一步も動かない。まるでその場に縛り付けられているかのよう  
に。

ガラツツ!!

勢いよく扉が開かれる。

そして足音の主は叫ぶ。

自らが初めて愛した者を抱くその女性へと・・・

「何・・・してるんだ！！

その表情には怒り以外に何も無かつた。ただ金髪の女性に対する怒り、憎しみ。

「私は幻想郷の管理者であります、八雲紫と申します。以後お見知りおきを」

「そんなことはどうでもいいんだ。何をしてるのか聞いてるんだよ！――」

「今にも殴りかかりそうな少年は何とかそれを堪えているらしい。しかし、現実はそれほど甘くは無い。

「見ての通り分かりませんか？私は彼女を元の世界へ連れ戻しに来ただけですわ」

少年は我慢する、必死で堪える。  
でも・・・現実は待つてはくれない。

紫は指をパチンと鳴らすや空間に裂け目を作る。

「彼女はとても幸せだったと思つわ。今まで生きてきた中で最高にな  
ね」

そう言つてスキマに足を入れる。

その先は外来人には未知の世界、そして踏み入れてはならない世界。

「それでは御機嫌よう少年。あなたと彼女の記憶は操

何を言いかけたのだろうか。

紫は言葉を詰めりせる。・・・いや、止めた。

それは本人の意思で止めたわけではない。

目の前にいる、ちつぽけな人間の行動によつて。

躊躇なく投げられたそれは紫の白い肌を掠り、赤い液体をホタホタと垂らさせた。

無防備でも突っ込む。

無理だと分かつていても突っ込む。

國へ拂ひれか奉は用一木の力を箭めて

重い一撃が振り下ろされる。

その拳にはひとくちの愛  
愛おしさが込められ……

廻廊の前の空間に裂け口を作り、それを少しあわせた。

勢い余つて落ちるに違ひない。誰だつてそう思つだらう。

賢者とまで呼ばれるスキマ妖怪 ハ雲紫たにてもう確信したのだが

これは本当に人間なのか？

紫の背筋が凍りつく。

観者とまで謳われるハ雲紫の表情までもが凍りつく。あのスキマを、空間操作を無視して突っ込んでくるなんて有り得ない。

い  
！  
！

アーティスト！

重い一撃は躊躇なく紫の腹へ抉りこまれる。

全身の力が一斉に抜け、抱きかかえていたさとりを落としてしまう。

『新古今和琴』

床に倒れるさとりに近寄る。

眠りから覚めたのか、それとも一連の出来事で目が覚めてしまったのか、俺を確認するなりすぐさま抱きついてくる。

俺は優しく背中を撫でてやる。

「逃げよう！」）は危

ズドンッと、襖に激突する鈍い音。

ハ雲紫の一撃には人間に重す老父一撃

ぐつたりと頃垂れる啓祐、最早ピクリとも動かない。

喚くぞとり、妖怪らしくない！

「若造が・・・お前は死に値する。私が今ここで葬りをつてあげるわ――！」

それは人間はおろか、並大抵の妖怪ですら太刀打ち出来ないほどの大スペル。

弾幕が徐々に押し寄せ、囮み、死へと誘導する。

意識の無い相手には地獄ともいえようスペル。

啓祐に勝ち目はあるか、生きる希望すら与えない。

「私たつてこんな強硬手段は取りたくなかったわ。けれど、あなたの抵抗によつてそれは不可能となつた。精々自らの行動を後悔することね」

弾幕が徐々に押し寄せる。

幻想郷以外で弾幕など見ることも知ることも無い。  
意識の無い中、これを避けるなど無理、不可能。  
意識があつても同じこと。

「あなたの努力は認めるわ。この妖怪をどれだけ愛していたかもね  
！」

弾幕は啓祐のすぐ傍まで押し寄せる。

あと一步で全てが終わる、紫はそう確信していた。

今日は自らの勘を後悔する一日なのだろうか。

これほどまでにイレギュラーが起こるだらうか？

「・・・・・やめて、ください・・・・・

紫髪の少女が立ちはだかる。

力量の差は明らか、太刀打ちなどできる筈も無い。

それでも立ち上がった。

自らを愛してくれた者を守る為。

私を心底愛してくれた人間を守る為！－！

「この人を傷つけるのはやめてください！－！」

紫は呆然とする。

幻想郷は妖怪と人間が住む世界だ。

それぞれが捷を守ることによって共存が成り立つている。

それ以上に互いに親しく接する者達もいる。

ただ、これまでに人間と妖怪の愛などは見たことも聞いたことも無い。

しかし、それが今日の前で起こっている。

予測も出来ない、何が起こるかも分からぬ。

パワーバランスが崩れるかもしね、幻想郷そのものに影響が出るかもしれない。

あらゆる事態を予測し、古明地さとりを回収するといふことで一段落するだろうと考えた。

でも、それは甘かったのかもしれない。

本当に甘かったのは私自身だったのかもしれない。

「・・・・・いいわ」

弾幕結界を焼き消す。

まるで最初から何も無かつたかのように・・・

その部屋は綺麗さっぱり元通りになっていた。

「一日、明日の晚まで猶予をあげるわ。それまでに全てを決めなさい

「あなた自身がどうしたいのか、そこの少年はどうしたいのか」

まつたく、つづづく甘過ぎると思つ。

「あなた自身がどうしたいのか、そこはスキマに体を潜らせる。

姿こそ見えないが、声だけは部屋に響く。

「幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ」

それはさとりへの一つの救いなのかもしない。

自らの甘さを分かりつつも、それでもやはり非情になり切れない。いくら幻想郷の為とはいえ、どうしても甘さが優先してしまう。普段は胡椒臭くとも、根はこじりいう妖怪なのだ。

体が痛む。

それとは別に、頭に柔らかく、温かい感触がする。ゆっくりと目を開ける。

目を真っ赤に腫らし、今にも泣き崩れそうな表情のさとりがいる。何故そんな表情をしているのか・・・

そうか、俺はあの人にくじ飛ばされて・・・

「・・・・・啓祐さん！！」

俺が瞼を開ぐと同時に、さとりが叫ぶ。ゆっくりと痛む体を起こす。

よほどダメージを受けたのだろう・・・意識を保つだけで精一杯な

のかもしない。

「よかつた・・・よかつた・・・

ポロポロと涙を零すひとつ。

俺はなげなしの力を右手に籠め、泣きじゅぐるひとつの頬を優しく撫でる。

「・・・じめん、な・・・

そしてひとつを抱き寄せせる。

温かい体温が体中に染み渡る。

本当に温かい、そしてこの温もりを手放したくない・・・

「・・・寝ていてください。起きちゃ駄目です・・・

そう言つて俺の体を横にせぬ。

その上から覆いかぶさるかのように、唇と唇を重ね合わせる。何度も何度も・・・愛おしことに重ね合わせる。涙を零しながら、一度と離すもんかと言わんばかりに・・・

## 第八話 「決意は未来へ」

翌朝の自宅には2人の姿があった。

全身打撲で満足に動けない少年と、せつせと家事をこなす少女。今日は大学のはずなのだが・・・生憎行けないのだろう。

「（）めんねさとつさん・・・色々やらせわやつて」

「全然構いませんよ。休めるときぐらーこいつぱい休んでください」

掃除機を引つ張りながら床の埃を吸い取つていぐ。

ブオーと部屋中に掃除機の振動が鳴り響き、テレビの音を搔き消す。そんな中、少年少女は今後について深く考えさせられていた。

八雲紫、彼女は幻想郷の管理者と名乗つた。

さとりを連れ帰り、全てを元通りにすると言つた。

俺は我を忘れてさとりを助けようとしたが歯が立たなかつた。

「（・・・・・）どうすりや・・・いいんだ・・・（）

悩んでも答えは出でこない。

それはまるで迷宮の迷路に迷つてしまつたようだ。

「・・・大丈夫ですよ。私は・・・もうどこにも行きませんから。あなたの傍にずっといるつて決めましたから」

掃除機の音が止むと同時に、さとりはそう口走つた。とても嬉しいなのがどこか引っかかる。

そう、さとりの故郷、幻想郷についてだ。

「さとりさんは・・・帰りたいとは思わないんですか？」

その質問にさとりは黙り込んでしまう。

そりや誰だって故郷に戻りたいのは当然のことだろう。  
さとりは無理をしてここにいると言つてゐるのではないか?  
そういう疑問が湧いてきてもおかしくはないだろう。

「・・・少し、お話をしてもいいですか?」

人も妖怪も、自ら口にしない限り思つてることを知られるなんて  
嫌だろ?。

それを可能にしてしまう能力、”読心術”

とある世界には読心術を持つ少女がいたそうだ。

彼女は心を読めるというだけで人間や妖怪からとことん嫌われた。  
皆が自分から離れていき、気が付けば妹と2人だけだった。  
常に孤独を味わい、誰も相手してくれなかつた。

そんな私を好いてくれたのは動物達、今でいうペット達だった。  
言葉を話せない彼ら彼女らは私の読心術を大いに気に入ってくれた。  
今となつては地霊殿にはペット達がたくさん住んでくれている。  
そんな人間や妖怪との関わりを絶つていた私。

いつの間にか知らない世界へと足を踏み入れていた私。  
今思えばあの散歩と称したお出かけが私の末路を変えたのかもしけ  
ない。

1人の少年と出会い、私は人間と関わることを味わつた。  
彼はとても優しく、有無も言わずに私を家に泊めてくれた。  
ご飯も作ってくれる、洋服だつて買つてくれる。

旅行にだつて連れて行つてくれる、私を命がけで守つたってくれる。

私は幸せ者なのかもしれない。

人間を毛嫌いしていた私が人間と共に人生を歩む。こんな妖怪の私でも・・・居場所があつたんだと・・・

ひとりの瞳から涙がぽろぽろと零れていた。

常に孤独で生きてきたその境遇は俺と似ているのかもしれない。幼い頃に両親を亡くし、祖父祖母に育てられてきた。

まだ幼かつた俺に両親の死とは辛い以外の何物でもなかつた。

俺は無口、無表情。

誰とも喋らず遊ばず、ただひたすら孤独に生き続けてきた。そんな俺にも今こつして幸せに生きることができる。

親友が出来、ひとりとこつして出会い、共に暮らしている。

これがどれほどの幸せか・・・過去の自分じゃ希望すら抱かなかつただろう。

「ひとりさん・・・」

俺はそつとひとつの体を抱き寄せる。

泣きじやくり、冷え切つたその体を一日一杯抱きしめる。

じんわりと温もりを分け与え、辛かつた過去を共に分かちあおうと・・・

「啓祐さん・・・・・・・・」んな私でも・・・ずっと一緒にいてくれますか・・・」

さきほどと比べて更に力を込める。

もう離さない、お前は俺と共にいるべきだと。

そして耳元で小さく呟いた。

「さとりさんが何であろうと・・・俺はずっと傍にいます。たとえこの地を離れることになつても・・・」

再び脣同士が重なり合つ。

もう幾度も交わしたキス・・・

それでも気持ちは変わらない、たとえ世界が破滅しようとも・・・

・・・部屋には暫く静寂が漂つた。  
光だけが差し込むその部屋で2人の少年少女は抱き合つていた。  
そして、まるでタイミングを見計らつたかのように彼女は現れる。  
スキマを掻い潜り、空間の裂け目から突如として現れる。

「あなたのその言葉、しっかりと聞かせてもらつたわ

金髪の女性はふわっと地に舞い降りる。

少年少女は敵対する意思は見せない。

最早2人にとって八雲紫は敵ではない、むしろ恩人とも呼べるべき存在なのかもしない。

「覚悟は出来まして?」

「ああ・・・連れて行つてください。僕もさとうさんも・・・幻想郷へ」

少年の瞳に嘘は無かつた。

真っ直ぐに紫を見据えるその瞳にあるのはただたださとうを守り抜くという決心のみ。

もう一度とこちらへは戻れないかもしないのに・・・そんなことはどうでもいいらしい。

最早彼にとつてさとうとは全てなのかもしれない。あの話の妖怪が・・・幸せ者になりやがつてと。

「・・・今晚の時に再び迎えにきますわ。それまでに全ての準備と決別を終えなさい」

そつと風の如く消え去る紫。

最後に少年を見据えた彼女の瞳には何が映つていったであろう。

それは彼女自身にしか分からぬ。たとえ読心術をもつてしても・・

「・・・・・よかっただですか・・・?」

そとつねじらをじつと見つめる。

俺がこの世界を離れることに心配しているのだ。ひい。

それについては心配い無用だ。

俺にはさとりがいればいいのだから。

そこまで俺がさとりに夢中になってしまったのだから。

「さとうさんがいればいいんだ・・・もう、後悔なんてしてないよ

そう言つて再び抱きしめる。

今度こそすっと一緒に。

それは永遠の愛を誓う新郎新婦のように・・・

「紫様！」

彼女は紫に向けて声を荒げる。

無理も無い、今回彼女の取つた行動は極めて危険なことだったのだから。

「私は眠いのよ藍・・・少し寝かせて頂戴」

「しかし・・・！また外来人を連れ込むつもりなのですか！？あれほど駄目だと・・・」

「藍」

紫は鋭く、真剣な眼差しで八雲藍を見据える。  
その圧倒的な存在感に押される藍。

紫は危険を承知の上で行つたのだ。今回の行動を。

「確かに下手をすれば幻想郷のパワーバランスは崩れるわ。ましてや・・・人間と妖怪の恋など前例に無い」

紫は全てを分かつてゐる、幻想郷の現在の状態も、彼らが来たことによつて起つた可能性のある事態も。

それを全て踏まえ、それでも今回の行動に移つた。

彼女ほどの力があれば人間はおろか、あの悟りの妖怪だって瞬殺出来る筈だった。

しかし、彼女はそれを実行しなかつた。

「それでも・・・面白いじゃない？それに今の幻想郷には少し必要な刺激だと思うの」

楽しげに語る紫の表情は微笑んでいた。

後にも先にも見せたことのない、愉快な表情。

困惑しきる藍を無視して話を続ける。

「それに藍、私は少しの賭けをしようと思つて。彼らにその賭けを託して・・・」

今現在、幻想郷のパワーバランスは危機に直面している。博麗の巫女のおかげでそれはなんとか保たれているが、彼女一人では限界もある。上級妖怪こそ人間は襲わない、そこに立ちはだかるのが中級、下級妖怪の大群だ。

幻想郷には鬼、吸血鬼、妖精、神と多種にわたる者が存在する。それら全てが力を合わせれば他の妖怪など塵にすらならないだろう。しかし、幻想郷に協力なんて言葉は殆ど皆無に等しい。

「彼らは最後の希望と言つてもいい。もしかすれば、幻想郷が良い方向へ向かうかもしれない」

ただしそれは危険な賭け。

そもそも何の能力も持たない人間が人里以外で暮らすこと自体危険なこと。

それでも紫は賭けに出てみると誓つたのだ。

「賭けは当たり外れがあるからこそ楽しいもの。それに・・・私が賭けで負けたことがあるかしら？」

外は既に暗闇と化している。

街灯の調子が悪いのか、チカチカと点滅しながら外を照らしている。部屋には大きめのキャリーケースと小さなキャリーケースが一つづつ。

彼らはこの地を離れる、その決心の表れだ。

「準備はよろしくて？」

金髪の女性は愉快に微笑む。

「ああ・・・我儘を聞いてもらつてすまない・・・本当なら俺はここにいるべきなのに・・・」

「構いませんわ。どうせ、彼女一人を連れ戻そうとすればあなたは必ず私と敵対する」

ははっと俺は苦笑いし、大きい方のキャリーケースの取っ手を握った。

隣にいるさとりは小さなキャリーケースの取っ手を掴んだ。

もうこの地に戻ることはないだろう・・・

親類と親友にはありがとうとメールを送った。

アパートの契約は解除した。

もう・・・未練は無い。欠片たりとも残っていない。

「あなたの決心には感謝致しますわ。では・・・ようこそ幻想郷へ」

空間が裂け、俺とさとりはその中へ入り込む。

これからどのような未来が待つているのか、正直予測不能だ。

それでも俺はこの道を選んだ。

さとりを守る為・・・

それだけが俺の使命、そして決意。

俺は未知の世界へ足を踏み入れる。

これから先何があろうとも・・・さとりを、守るんだと。

## 第一章 完

## 第九話 「始まりの始まり」

幻想郷は全てを受け入れる世界。

それはそれは残酷な話。

そんな世界に彼はやつて來た・・・

降り立つた地はまさしく自然そのもの。

辺り一面は森、草、川。

人間はこんな自然の中で暮らしていたのかと思うと信じられなくな  
る。

俺が都会に住んでいたのもあると思うが・・・

「ようこそ幻想郷へ。これからあなた達には地靈殿に行つてもらい  
ますわ」

地靈殿、名前からして地下世界かその類の場所なのだらう。  
幻想郷へ来る最中のスキマ内。

そこで紫から大方のことは教えてもらつた。

幻想郷はどのような世界なのか。

さとりの住んでいる地靈殿とはどのような場所なのか。

幻想郷で生きていくためにはどうすればいいのか・・・

「心配」無用よ。3分で到着しますわ

パチンと指を鳴らせばスキマが開く。なんとも便利な能力だ。

そうそう、この世界には人間のみならず多種にわたる者が住んでいるらしい。

俺が小さい頃から知っていたものなら魔法使いや吸血鬼、妖怪など。妖怪といつてもそこから多種にわたる妖怪の種族があるらしい。当たり前だと思うが俺は種族人間だ。

「・・・啓祐さん」

さとりが俺の服の裾を摑む。

その仕草は怖がる子供が親に縋り付くようなもの。

・・・可愛い。

「地霊殿には私の妹やペット達がたくさんいますが・・・皆良い子ばかりなので大丈夫ですよ」

「動物は好きだから大丈夫だよ。妹さんにも会つてみたいね」

こんなことを言つているが、本音を言つと不安で仕方がない。無理も無い、殆ど突発的に別世界へ来たのだから。

それもこれから住む場所は地下という・・・不安が募るのも当たり前だろう。

「着きましたわ」

再び降り立つたそこは夏場にも関わらずひんやりと涼しかった。

それとは対照的に、奥の方では明かりがチラチラと見え賑わっている。

紫の言つていた繁華街なのだろう。

「それでは私はここで帰らせてもらいますわ。生憎、ここには良い

思い出が無いもので、「

「うん、わざわざありがと!紫さん・・・言葉では言い表せないほど感謝してるよ」

「お気になさらずに。それではお幸せにお一人さん」

そう言つてスキマの中へ帰つていく。

数秒して紫の気配はプツリと途切れた。

繁華街にも行つてみたい気もあるが、今は地靈殿に行くのが先だ。事前に何も言つていなゐ為、さとりと共に行かなれば侵入者扱いされるだろう。

「地下なのに明るいんだね。電気はどこからきてるの?」

「河童達の技術で電気をこちらへ送つてくれさせているみたいなんです。私もそれに關しては無知なもので・・・」

幻想郷に住む河童は技術力が凄いらしい。

外の世界、つまり俺の住んでいた世界の技術に興味を持ち、それが発端になつたと紫に聞いた。

かなりオーバーな部分もあるみたいなのだが・・・

「着きました。ここが地靈殿です」

何とも威圧感のある建物だ。

扉を開けば中はどうなつてゐるのか・・・想像がつかない。

俺はこれからここに住む、そして生活をしていく。

・・・正直不安が募るばかりだ。

「お姉ちゃん」

後ろから声がかかる・・・後ろから?

驚いた俺は咄嗟に後ろを振り向く。

しかし、そこにはただ静かな空間があつただけで・・・

「お兄さんが啓祐って人?」

今度は扉の方から声がする。

またもや咄嗟に振り向こうとしたのだが、振り向くフリをしただけであつて・・・

「ー?だ、誰ですか・・・」

白髪に緑色の瞳の少女・・・

服装はさとりに似ているが、色合ひがまったくして違つ。そしてその少女は俺の方をまじまじと見つめる。観察するかのように。

「勘が良いんだ。私の姿を見れるなんて珍しい人間だね」

「こーし、こちらへ来なさい」

さとりに言われて俺の前から立ち退くこいしと呼ばれた少女。彼女がさとりの言つていた妹なのだろうか・・・確かに似ている。

「私の妹のこいしです。」迷惑をお掛けしてすみません・・・

ペコリと頭を下げるれとづ。

俺は別に良いよと言こいしの下へ歩んだ。

「突然押しかけてごめんね」

「ううん。話は聞いてたからいいよ。私だって少しは楽しみだつたし」

どうせ紫が先に話をしていたのだろう……あの人の考へることは正直よく分からぬ。

胡椒臭いというのが似合つのだらうけど、俺にとつてあの人は今的人生を作ってくれた恩人もある。

悪い人じやない、根は良い人なんだ。

「啓祐さん、中へ入りましょう」

さとりに言われて地靈殿の中へ足を踏み入れる。  
新たな人生の幕開け、そして悲劇の幕開け。

幻想郷では何が起こるか分からぬ、そう、それは紫でさえも予知しきれぬこと……

「掃除中に邪魔をするな勝手に入るなくつぶぐな」

幻想郷の端に位置する神社、博麗神社の巫女さんこと博麗靈夢は筆片手に縁側に向かつて叫んでいた。

そこには綺麗な金髪女性こと八雲紫がぐつたりと寝転がっていた。  
まるで自然に溶け込むかのような感じなのだが……

「こいじやなこ、さうせ参拝客なんで」ないのでしょ？」「

「ナリヒに「問題ぢやない、寝転がりたいなら掃除の手伝いでもしなれー」

せつせと落ち葉を掃く靈夢を横目に、紫は神社から見える景色を眺めていた。

その先には地上からは見えぬ場所、地靈殿があるのでナリヒ。彼女の瞳には何が映っているのか・・・

「・・・・お腹が空いたわ」

最早靈夢の耳には届いていないらしい。

落ち葉を掃き終えた靈夢は簾を地面に置き縁側に座った。

皿に盛られている煎餅を一枚手に取り、パリパリと食べ始める。

「私も食べていいかしら？」

「駄目って言つても食べるんでしょ？ていうかもう食べてるじゃない・・・」

パリパリと煎餅を食べる靈夢と紫。

これでも幻想郷の異変を解決する異変解決屋もある。今の靈夢にその面影はないが・・・

「・・・どうせまた面倒なことでもしたんだしょ？」

分かつてゐるかのように靈夢は呟く。

やれやれとため息をつく紫は煎餅を食べ終え「ひづいた。

「面倒ではないわ。あなたも分かっているでしょうけど……今の幻想郷には必要なことなのよ」

「必要ねえ……私に危害が及ばないなら別にいいけど」

二枚目の煎餅を食べ始める靈夢。

彼女の視線は青い空、虚空を見つめている。

彼女は巫女であり異変解決屋でもあり、幻想郷を保つ為の博麗大結界の管理人もある。

かなり重要な役割なのだが、彼女はそういう類のことは面倒らしい。

博麗の先祖がこれを見たらどう思うか……

「…………少し野暮用が出来たみたいね」

そつとつて境界を操りスキマを出現させる紫。

さつと入ってはさつと閉じる。

神出鬼没と呼ばれるのはこれが原因なのだろう。

「…………はあ、当分の間は暇が無くなるのね……それはそれで嫌ね」

靈夢はため息をつきつつも立ち上がる。  
飛び立ち、目指す場所はとある森の中。

本人には言っていないが、彼女の友でありライバルでもあるとある人物の下へと……

「お兄さん、ゆで卵食べよ!」

靈鳥路空、やとりのペットでもあり地獄鴉らしい。見た目から想像がつかないのだが……  
彼女の手にはゆで卵がたくさん入ったざるが握られている。  
これほどの卵を食べたら高血圧で死んでしまいそうなのだが……

「お空、無理に食べさせるのはやめなさい」

「うひゅ……じゃあ一個ねー」

そつ言つてゆで卵を一つ受け取る。

お空はざるを持ったまま奥へ走つていった。

・・・なんとも賑やかな場所だ。

「『』めんなさいね……あの子つたら人懷つ』くて……」

「いや、すぐに馴染めて俺は嬉しいよ。お燐つて子も面白いしね」

地霊殿にやつて来て数時間、俺はまるで元から住んでいたかのような感覚に陥っている。

それもこれも彼女たちがあまりにも人懐っこいからだ。

お空はゆで卵が好物らしく、時間が経てば俺にそれを食べるかと勧めてくる。

お燐は猫の妖怪らしい。猫車に乗せてもらい地霊殿を軽く案内してもらつた。

ここにはさとりの妹、神出鬼没でどこでどこで出会つか分からぬ。ゴニークなこの場所は案外すぐに馴染める気がする。

「……よかつたよ、俺はここに来れて。やとりさんと一緒にいれ

「うなうひーでもこいんだナビね」

そつとさとりの傍に寄る。

顔を赤めながらも俺に近づいてくれるやつだ。

「啓祐さんは・・・」言いつゝが大胆なんですから・・・

「やっぱりそういう関係だつたんだ。私の勘も少しばくなつたのかな」

ビクッと体を震わせ離れる啓祐とさとり。こいしが愉快そうに一コッと笑みを浮かべている。

「お姉ちゃん笑うようになったね。私は、お姉ちゃんのそんな表情見たことないよ」

確かにさとりはよく笑ってくれるようになった。俺だってそう思つ。さとりの笑顔は俺にとって癒しの他のなんでもない。さとりが笑ってくれれば俺までもが嬉しくなる。

「よかつたねお姉ちゃん」

こいしも笑う。

それにづられるよにせどりも、俺も笑う。

地靈殿、悪い場所じゃない。

もし願いが叶うとするなら、叶うといひで暮らしたいと懸つ。無論、ひとつと一緒にだね。

「そ、うだお姉ちゃん、パー、テイー、しょ、うよ」

## 第十話 「嫉妬」（前書き）

初前書きです（笑）

今回は少し急展開、超展開になつてしまつたかと・・・  
それでも読んでくれるあなた様には感謝感激です。  
それでは宜しくお願ひします。

## 第十話 「嫉妬」

そこは暗い暗い、一筋の光すら差し込むことのない暗い世界。全てが終わり、何も始まることのない消えた世界。

そんな世界に一つの人影があった。

漆黒の服に身を纏い、銀髪の髪をくるくると指に巻きつける男。肩甲骨辺りまで伸びた髪をゆらゆらと揺らしながら歩く少女。彼らの表情に光は無い。

あるいは憎しみと、そして希望を捨てた暗い表情。

「・・・どうだ」

男は小さな声で呟く。

何かを操作している少女は男の声を聞き、数秒して答えた。

「数値は安定しています。このままいけば数日で侵入できるかと・・・」

「

「そうか」

質素な返事と共に煙草に火をつける。

口から吐く副流煙が少女には辛いらしく、顔をしかめながらその場を離れた。

幻想郷・・・楽しみな場所だ。

「それじゃあお兄さんとお姉ちゃんの結婚を祝つ 痛つ…」

さとりが顔を最高に紅潮させながらこいしの頭を叩く。

涙目になりながらさとりの頭を叩く2人の姿は姉妹喧嘩そのもの。お空とお燐と3人でそれを見つめる。

「・・・いつもあんな感じなのか？」

「さとり様もこいし様もいつもは仲良しだけどねえ・・・ほら、喧嘩するほど仲が良じって言ひしやー。」

確かにそれは一理あるかもしれない。

喧嘩が出来るのは喧嘩をしてもその仲が途切れないから。

互いに信頼してなければ出来ない」と。

だとすれば、さとりとこいしは最高の姉妹なのかもしれない。

「いいじやん！お姉ちゃん、お兄さんと結婚したいんじょー！？

「な、な、・・・そ、そういうことは言ひもんじやありませんこいしー！」

パーティーは波乱の幕開けだった。

姉妹喧嘩が収まりそうになく、俺は1人席を外した。

地靈殿はお燐に軽く紹介してもらつたが、詳しく見たわけではない。気になる箇所もあると言えばある。

ただし、勝手に物色する気にはならないしなれない。

「・・・幻想郷・・・地靈殿、ねえ・・・」

俺にとつてこいつ世界はまさに非日常的なものだ。

紫さんが良い例だろ。」

境界を操って空間を裂きスキマを作る。  
普通そういうことは出来ない、不可能だ。  
それを容易く成すのだから非日常なんだ。  
しかし、今の俺にはそれが日常となりつつある。  
元の世界・・・日本が非日常になる日も近いかもしない。

「…………ん」

後ろに気配を感じ、咄嗟に振り向いた。  
頬を赤く腫らした紫髪の少女、古明地さとりがテクテクと歩いてくる。  
俺を探しに来たのだろうか・・・姉妹喧嘩は思つたより早く幕を開じたらしく。

「「」となんといふことだったのですね・・・」

「わざわざ探しに来ててくれたのか・・・」「みんな」

ひとつ頭を撫でてやる。

いつもするとそれとつけあわせば、あの笑顔が間近で見れる。

「「」こしつたり・・・」「みんなさい、あんなことにになつちやつて・・・」

申し訳なさそうに謝るもつ。

謝らなくてもいい、むしろ・・・嬉しかつたぞ俺は  
と、心の中で呟くと今は更に顔を赤めた。

「あの、ですね・・・啓祐さんの世界では・・・け、結婚どころも

のは・・・どんな感じなのでしょうか・・・

一般的なものは新郎がタキシード、新婦はウェディングドレスを着るやつ。

教会で愛を誓うやのケーキ入刀だの披露宴だの・・・ 知り合いが結婚しないのでいまいち分からるのが本音だけど。

「ま、そう深く考へることはないよ。・・・・・・ 結婚、ねえ・・・・・」

考へて いるうちに俺までもが顔を赤めてしまつ。

誰もいない廊下で男女が顔を赤めて立ち尽くすなんて・・・何のドラマだこれ？

「あ、あの・・・」

呼ばれて振り向けば、待っていたのはさとうの間近に迫る幼い顔。そのまま吸い込まれ、唇が重なり合つ。

甘い香りが漂う・・・何て良い香りなんだろう。

舌が絡まり合う、こんなキスが出来るなんてこゝは夢か楽園か？

・・・なんて考へていたのは数か月前のこと。

今となつてはこゝしてキスをするのが当たり前になりつつある。

「ふはつ・・・・・・ 啓祐さんの・・・味がします・・・

大胆に言つのはさとうもだぞと心の内で呟く。

「「」と笑みを浮かべるさとう、そして俺に背を向ける。

「早く始めましょ」・・・ 啓祐さんのお祝いパーティー・・・

「ああ・・・楽しみだ」

小走りでその場を去るさとりを追いかける。  
広い廊下に2人の足音がカツカツと響く。  
誰もいなくなつた廊下には静寂が戻り、それは一種の不気味を生み  
出す。

「・・・・・」

誰も気づかない。

彼女は無意識に現れ、無意識に去る。  
そう、無意識に生まれる感情も・・・  
姉に対する、嫉妬や殺意までも・・・

「！」のキノコといれを混ぜて・・・うあー！？」

ボンッ！と爆発音が響く。

森の中に佇むこじんまりとした家、その中から白黒の衣装を纏つた  
少女が出てくる。

霧雨魔理沙、幻想郷に住む魔法使いだ。

「ちい・・・最近上手くいかないぜ」

「最近じゃなくていつもでしょ？が。少しづまともな実験したらどうなのよ？」

魔理沙の田の前に降り立つ巫女さんこと博麗靈夢。  
それを見て爽快な笑みを浮かべる魔理沙。

彼女達は幻想郷の異変解決屋。

もとも、魔理沙は解決屋ではないのだが。

「アリーヤ・靈夢、最近変わったことないか?」

「あるも何も・・・そのうち暇がなくなるわよ」

めんどくさいから、近くにあつた手頃な切り株に腰をかける靈夢。  
ほつきを左手に帽子のつばを触り、ふわっと浮き上がる魔理沙。

「・・・ビルに行くの?」

「靈夢と回りだぜ。やるなりやれとやつた方が楽だぜ?」

やれやれと言わんばかりにため息をつき、これまらめごどくわいつ  
に浮き上がる靈夢。

本当に面倒なのはこれから・・・そつ靈夢の勘が言つている。  
幻想郷は如何なるものも受け入れる。  
たとえそれが脅威であつても・・・

これが全て手料理なのだから驚かれる。  
机に並ぶのはケーキからオードブルから・・・  
パーティーというよりかは披露級だぞこれ?

「ん・・・美味しい、美味しい・・・泣けてきた」

「泣かないでください・・・そんなに美味しいですか・・・？」

うるさいと頷きながら料理を口に運ぶ。

俺と同じようにお空もお燐も料理を食べている。  
さとりはそんな俺を見てクスクスと笑っている。  
しかし、そんな中一人姿を見せていない。またどこかへ行つ  
てしまつたのだろうか？

「折角のパーティーだといつのに・・・少し探してきますね」

さとりは立ち上がり、こいしを探すべく部屋を出る。  
パタンとしまる扉の音は何かを遮断するかのような後味の悪い音。  
またもや胸騒ぎがする・・・でも、紫がまたあのよつなことをする  
とは思えない。

ただの勘違いだといい・・・そつ願ひばかりだった。

「・・・お燐、少し教えてほし」とある

誰もいない廊下を淡々と歩く。

あの子は無意識を操るから田を凝らす程度じゃ見つけぬ」ことが出来  
ない。

・・・実際はどうやっても見つけれないのだが。

「「こし?折角のパーティーなのだから帰つてきなさい。」こし?」

呼びかけても応答は無い。

それとも、隠れて驚かそうとでもしているのだらうか?  
「こしの」とだからまた冷やかしでも……

「(…………誰か来る)」

咄嗟に後ろを振り向けばそこには白髪の少女が睨んでいた。

姉を見るような目じゃない……

それは憎しみを存分に含めた瞳。

嫉妬心とはこれほどまでに狂氣と化すものなのだらうか。

「お姉ちゃんばかり……お姉ちゃんばかり……

「何を言つてゐるの……?」「こし、こし?」

俯いたままのこいしに呼びかける。

返事がない、無視をしているのか聞こえていないのか。

ただこれだけは言える。今のこいしは普通じゃない。

同じ空間にいるだけで分かる……ドス黒いオーラが。

嫉妬から生まれた憎しみ、そして殺意。

「お姉ちゃんばかり……!する!、する!する!……!」

たつた半日で嫉妬心とはここまで膨大なものになるのだらうか。  
それは個人差があるのだろうか、それでもおかし過ぎるほどこいし  
の嫉妬心は大きい。

「私にも幸せを頂戴……お姉ちゃん」

やつぱりそうだったんだ。

最初から何かおかしいと思っていた。

口も顔にも出さなかつたが、俺の勘は悪い意味で当たつていた。  
しかし、それでもやはり引っかかるものがある。

「（）いしちゃん……何か憑いていた……」

俺には靈感なんてない、ましてや特別な能力すらない。  
それでも何故か感じた、悪霊のような気味の悪い感覺。  
こいしに纏わりついたあの気持ちの悪い感覺。  
そう……せとりが危ない。

「（でも……俺に何か出来るのか……俺に敵対するほどの力があるのかよ……）」

人間は愚かだ。

1人じや何も出来ない……  
足手まといになるだけ……  
でも、それでも俺は走る。ただひたすら走る……！

「せとりさん……」

長い廊下が更に長く感じる。

感覚とは恐ろしいものだ。

しかし、だらだらと走っている暇はない。

普段から運動をしなかつた自分を恨みたい。

「ひ・・・・・くそつたれツツーーー。」

## 第十一話 「本当の幸せ」

無数に放たれる弾幕。

追い込むかと思えばフヨイク。

前から後ろから、上から下から・・・

こいしはあらゆる方向から弾幕を放つ。

「！」こし・・・・・やめなセー！」

さとりが叫ぶもこいしはやめない。

弾幕は次から次へと放たれる。

「あはは！…楽しいよお姉ちゃん！」

弾幕の1つがさとりの顔を掠める。

一筋の赤い液体がそつと垂れ、さとりは顔をしかめた。妹の狂気・・・こんな今までで一度もなかつたはず。姉妹喧嘩は度々するが、こんな喧嘩はしたことがない。何がこいしを動かしているのか・・・心が読めない。

「それ……」

高密度の弾幕がさとりを襲う。

避けきれない、そう感じたさとりは避けるのを諦め弾幕に突っ込んだ。

防御姿勢を取っていたおかげでダメージは最小限に抑えられた。

「やめなさ」・・・やめてー！」

「・・・やめないよ。お姉ちゃんばかりずるこもの」

こいしの顔が歪む。

狂気に満ちた笑み・・・

それは笑みではないかもしれない・・・

「お姉ちゃんばかり・・・私だつて・・・私だつて・・・」

放たれる弾幕が突如やむ。

下に俯いたままこいしは喋り続ける。

悲しい、か細い、今にも消えてしまいそうな声で。

「私だつて幸せになりたい・・・お姉ちゃんみたいに笑つていていい！..私だつて好きな人つくつて一緒に笑い合いたいの！..！」

それは叶わぬ願望かもしれない。

でも、それを叶えた人物がいるから。

目の前に、実の姉が。

「お姉ちゃんばかり良い思いするのなら・・・みんな××ばいい」

「！」こいし・・・・・！」

こいしが言い放った言葉にさとりの形相が歪む。

それはさとり自身に放たれた言葉では無い。

お燐にもお空にも・・・啓祐にだつて放たれた言葉。

さとりの堪忍袋がいい加減限界を迎えたらしい。

「いい加減にしなさい・・・ふぞけるのもいい加減にしろーー」

「いい加減にするのはお姉ちゃんの方だよ……私は何故いつでもこんな目に合わなきゃならないのよ……」

廊下に響き渡る2人の少女の怒鳴り声。

それは救いを求めた声なのかもしれない。

それは愛する妹を守る為に放たれた声なのかもしれない。

しかし、2人に2人の声は届かない。

手遅れ、共に守るべき線が切ってしまったのかもしれない。

「私だけならまだしも……お燐やお空……啓祐さんにまで……！」

さとりが一步一歩歩みを進める。

ガツガツと、怒りの籠つた一步。

こいしは田頭に涙を溜めながら訴える。

「私は幸せになりたいの……お姉ちゃんみたいに幸せになりたいだけなの……！」

その言葉はもうさとりには届かない。

生涯唯一愛した彼を侮辱されたさとりにはもう届かない。  
確かに理不尽なかもしれない。

さとりもこいしも辛い思いをしてきた。

人間から嫌われ、妖怪から恐れられ。

そんな中、さとりだけが幸せを手に入れた。

それをこいしは嫉妬した。

当たり前なのかもしれない。それでもこいしは嫉妬した。  
もし立場が逆だったら？

さとりは我慢していただろうか？

それともこいしと同じく嫉妬し、今に至つただろうか？

分からぬ、それでもこれだけは言える。

愛した者を侮る者で誰が黙っていると思つ。

「あ、お姉ちゃん……おめでたす……おめでたす……」

一步一歩近づかれといつから逃れぬいわぬじよ。

いつものお姉ちゃんはない。

そこには愛する者を侮辱され、我を失つたさと。」

さとつの手が伸びる。

こいしの髪を掻むように、引き千切るかのよつて。

ただただか弱い少女がそこにいるだけ。

鈍い打撃音が響く。

涙をボロボロ零しながら顔を上げるこいし。

伸びているが・・・動かない。

そして、わざわざ田線はいここの上をいつていた。

「…………何してる?」

そこには1人の少年がいた。

茶色の混じつた黒髪、黒色の瞳をした少年が。さとりの頬を思いつきり叩いた少年が。

「黙つてないで答える。何してた！？」

少年は怒鳴る。

自身の愛する者を田の前にして尚怒鳴る

「何があつたか知らないけどな・・・何故こんなことをした!?

さとりの瞳からも涙が零れ落ちる。

立ち崩れる珠と、怒りこ満ちた磐石。

「わ、私

涙が止まらない。

自分が何をしたのか  
見れば分かる

さとりも泣き崩れる。

泣き崩れる2人の少女は揃あれ立が廻ぐす  
雖然として、亡地靈殿の廊下に再び静寂が戻る。

「この辺りの声を除いて……」

気持ちがおさまったのか、2人の少女は落ち着いてベッドに座っている。

お互に視線を合わせ、まるで意思疎通でもしてゐるかのよひに頷く。

「……ま、大事に至らなくてよかつたよ」

「「めんなさこ」・・・「めんなさこ」・・・」

さとうはひたすら謝り続ける。

そんなやうとつを優しく抱きしめる。

隣では「こしがじつとこひらを見ている。

「・・・」「こしあやんも、おいで」

セツナヒトサベビリ近テハサレリ。セツナヒトサベビリ近テハサレリ。

そして俺の胸田掛けて飛び込む。

さとうとここし、2人の少女。

互いに辛い経験をし、互いに同じ道を歩んできたのかも知れない。

そこで道が分かれ、互いに別々の感情を懷いたのかもしれない。

今回の喧嘩は色々な意味でよかつたのかも知れない。

「・・・言こたい」と言えてすつきりしたる?何か言いたいときは言えぱいいんだよ。ま・・・あんな喧嘩は駄目だけどね」

2人を強く抱きしめ呟く。

俺は何がしたいのか・・・自分でもよく分かっていない。

「せ、俺の為のパーティーはどうなったのかな?まさかあれでお開きなんて悲しいことはないよな?」

「それでは・・・啓祐さんの移住祝いです・・・乾杯」

「　「　「乾杯！」　」

波乱万丈な初日だったと思つ。

そんな中で俺のお祝いパーティーは再び幕開けをした。  
相変わらずの豪勢な料理、全部ひとりといしが作つたらしい。

「・・・やつぱり美味しい」

一日で二回もこれを食べれるのだから俺は幸せ者だ。  
ガツガツと料理を頬張る俺の横で2人の少女が何かを話している。

「こいし・・・わざわざめんなさい」

「わん・・・私が悪いの。理不直に怒りあがつて『めんなさい』

・

俯く妹の頭にポンッと手を置くさとつ。

優しくくしゃくしゃと髪を撫でるその姿は優しいお姉ちゃん。  
俯いていたこいしの表情が段々明るくなっていく。

「お姉ちゃん・・・」

さとつに抱き着くこいし。

それを優しく受け止めるさとつ。

仲直り、しつくつくる言葉だ。

やはり喧嘩はしても姉妹は姉妹。これでこそ本当の姉妹なんだろう。

「（私も自分で幸せ探すから・・・お姉ちゃんは早く結婚して子供作りなよ）」

ぼそつとこじがさとつの耳元で囁く。  
それを聞いて顔を真っ赤に染めるさとう。  
また始まつた、2人の少女による姉妹喧嘩。  
あまりに微笑ましくて笑みが零れてしまつ。  
・・・俺は幸せ者だよ。世界一の幸せ者だ。

「それで、現時点ではどうなのよ？」

「後数日といひいろいろかしら。ただし厳戒態勢は引き続き必要ね」

紫が有もしない書類をめくるような仕草をしながら答える。  
呆れ顔の靈夢は視線を逸らし、何も無い筈の虚空を見つめる。  
八卦路の調子を確かめる魔理沙は軽くマスター・スパークを放つ。

「相手が誰だらうとぶつ放すぜ」

「それは頼もしいですわ。私の出番が不必要なくらいに」

「あんたはここにいなさい。つたぐ、誰が起こるかもわからない異変の為に上空で待機してると思つてゐるよ」

2人の少女と1人の女性は幻想郷上空でふわふわと浮いている。それはただの雑談かもしれない、しかし、それでもないらしい。紫があれほどまでに真剣な眼差しで話したのだから。

”幻想郷に新たな脅威が現れる。それは過去最大の脅威かも知れない”と。

「・・・悪いわね靈夢、それに魔理沙」

申し訳なさそうに咳く紫。

それを聞いて2人の少女はため息をつく。

「困ったときはお互い様よ」「お互い様だぜ」

彼女達は幻想郷では数少ない人間の能力者。

代々受け継がれる博麗の力、努力の結晶が詰まつた魔法使い。

「ふふ・・・本当に頼もしいわ」

幻想郷も捨てたものじゃない。

そう、そんな幻想郷を守るのだから。

「（・・・守り切つて見せますもの。私の愛する幻想郷なのですか  
ら）」

## 第十一話 「漆黒の襲撃者、それぞれの思ひ」（前編）

話が急展開します。

果たして、それぞれの運命はどうなるのか・・・

## 第十一話 「漆黒の襲撃者、それぞれの想い」

光が差し込むと朝を迎えると自然に目が覚める。  
ふかふかとしたベッドが見た目以上に気持ち良くて、このままずっと  
寝たいとまで思ってしまう。

さらにその欲望に追い打ちをかける事がある。

左右から漂う甘い香り。

今の俺を見れば誰もが妬み、そしてふるまつてにされるだろ？

「（…………本当の幸せとは何なのか…………）」

左右から聞こえる吐息に我慢しつつ俺はむくっと起き上がる。  
お燐とお空は地霊殿にある温泉の管理を任されていぬりしこ。  
地下から湧く温泉が地下で入ることが出来る。

地上に入るよりも数倍も数十倍も気持ちいいのだろうな……

「…………やむ…………啓祐、さん…………」

寝ぼけながら俺のお腹周りに腕を回すとつ。

わざとやつてゐるのかと思わせるぐいこに正確に腕が回り込む。  
起きよつと思つたのだが……生憎ベッドへ逆戻りらしい。

「はあ……もう一眠りす

ゆつくりと寝転がるつもりが勢いをつけてしまつたらしく。  
いや、正確に言えば勝手に勢いがついた。  
そつ、まるで誰かに引っ張られるよう……

「何これでお兄さんはまだ寝るみね？私、一緒に寝たいな

銀髪の少女こと古明地こいし。

お腹周りはさとりに抱きしめられ、腕はこゝに抱きしめられる。普通ならこんなシチュエーション皆が喜び発狂するだらう。ただし、実際に直面する者は一概にそうではないこともある。修羅場・・・もしさとりが田を覚ましたらどうなるだらうか？その答えはすぐに導き出される。

もひとつ、実体験を踏まえての答えだが・・・

「・・・・・」

「へえ、さとり様がそんなことをするなんてねえ・・・」

地靈殿温泉管理地、名を間欠泉地下センターといふらしい。湯の温度の調整、温泉そのものの調整などを行う場所だ。俺は今お燐に温泉の調整の仕方を教えてもらつていて。

ただで住むのも図々しいと感じた俺が自ら言い出したことなどが、「怒ったかと思えば泣き出しちゃってさ・・・慰めるの大変だったよ・・・」

さとつが田を覚ませばこいしが俺の腕に抱きついていた。わなわなと体を震わせ、またもや姉妹喧嘩が勃発するのかと思いきや涙をぽろぽろと零し始めた。  
流石のこいしも俺からさつと離れ姿を消した。  
残つた俺は泣き続けるさとりを慰め続けた。

「・・・さとり様も変わったね。涙なんて流すような人じゃなかつたのにや」

「俺もそう思う・・・初めて会った時はこう、なんというか・・・人と関わることを極端に嫌つているような感じだったからさ」

お空が何かを放り込むのを背に俺は咳く。

初めて出会った時のさとりはどこか不思議だった。  
けれど、今はこれっぽっちもそうは思わない。  
さとりと出会えてよかったです。

こいつしてお燐やお空、こいしにも出会えた。  
自らの故郷を捨てるのにはやはり抵抗があつたが、それでもこれで  
よかつたと思つ。

「さとり様は幸せだと思うよ。あんたみたいなお人好しで優しい人  
と結ばれたのだからさ」

そう言わると照れくくなつてしまつ。

俺は自分自身をお人好し、優しいなんて思わない。  
どちらかと言えば人と関わるのがあまり得意ではない。  
仲良くしてくれる人達には心から感謝しているが・・・

「ま、さとり様を理不尽に泣かせたりしたらあたいが許さないよ。  
それだけは胸に刻んでおくといいぞ」

お燐からキツイ一言を頂き苦笑いする。  
いや、大丈夫だ。

俺は永遠に傍にいると誓つたのだから。

場所は幻想郷上空。

渦巻く雲が緊迫する空氣に更なる追い打ちをかける。

そこに3人はいた。

払い棒を片手にお札を構える巫女。

八卦路を構え、いつでも戦闘可能な状態を保つ魔法使い。

日傘に隠した表情から愉快さが見え隠れするスキマ妖怪。

「いかにも来るつて感じね・・・嫌ねこいつの」

「びびつてゐるのか靈夢？相手が誰であろうとパワーで押し切るだけ  
だぜ」

味方同士で火花をバチバチと散らす2人。  
そんな2人を後ろからじっと見つめる紫。

「（・・・後、7秒）」

眼差しが鋭く、真剣な表情へと変化を遂げる。

何かを感じ取ったのか、靈夢と魔理沙も眼差しが真剣なものへと変わる。

「構えなさい。始まるわ・・・覚悟してなさいーー！」

声を荒げる紫。

誰も彼女のこんな姿を見たことは無い。

日傘を閉じ、その眼差しから嘘は見えない。

ただひたすら虚空を睨みつけるその眼差しに映るものはただ一つ。

「出た場所にはお出迎えってかあ！？生憎んなもの頼んだ覚えはねえぞおらあ！！」

男は叫び、虚空から生み出した漆黒の刀を振り下ろす。

予め構えていた3人には、それを避けるには申し分のないくらい余裕があった。

「折角のお出迎えなんだからよお！…ちとは楽しませてくれよなあ！？」

漆黒の刀は両手に握られる。

一本の刃が交互に振り下ろされる。

狙いは魔理沙らしい、理由は分からぬ。

「おらおらー！逃げてばかりじゃつまんねえぞおいーー！」

「誰が逃げてばかりだつて？油断のしそうだぜ！…恋符「マスター  
スパーク」ー！」

構える八卦路から超極太のレーザーが射出される。

それは射程圏内の敵を全て葬り去る最強のレーザー。全出力を出せば男一人など木端微塵に・・・・・

「ならねえんだよな！…甘いわ糞魔法使いが！ー！」

不意に魔理沙の背に現れ、漆黒の刃を振りかざす。反応の遅れた魔理沙に避ける余地は残されていない・・・・・男は躊躇なく刀を振り下ろす。

体を裂き、赤い鮮血が飛び散る・・・筈だった。

男の振り下ろした刀は何もない虚空を空振りしだけだった。

「・・・油断していたのはあなたの方でして?」

「ちいっ・・・手間かけさせたな」

悔しそうに歯を食いしばる魔理沙。

境界の力を利用し、男の刀が当たる寸前に魔理沙をスキマへ落としたのだ。

まさに間一髪・・・

「氣を引き締めなさい。生温い考えは・・・死への近道になるわよ」

「今日も管理終わり!お燐!帰ろう?」

第三の足と称した右腕をパタパタを振り回す空。

それを見て静止させるべく空の下へ急ぐ燐。

あれは容易く振り回すような物じやないぞと言わんばかりに・・・

「・・・それでさ、さつきから何を見てるのかな?」

燐がそう言い放つと物陰から1人の少女が現れる。

赤い髪に真紅の瞳、見た目はまだ幼い少女。

「怨靈が少し騒がしいと思えば・・・何者だい?」

「・・・氷華。私はそのまま付けてもらつた」

以外にもあつせいと名乗る少女、氷華。  
しかし、あつせい過ぎるのは名乗るだけではなかつた。

「間欠泉地下センター・・・核の力、貰いにきました」

何や、胸騒ぎがする。

地上にも、そして地霊にも。  
一刻を争つかもしれない・・・

「・・・せとりさん?」

「あ、は、はい・・・何でしょう・・・」

不意に名前を呼ばれて驚いてしまう。  
無理も無い、こんな胸騒ぎは初めてなのだから。

「・・・ちょっと失礼」

ピタッとおでことおでこが引っ付きあつ。

ただ熱があるかないかを確かめているだけなのだろうけど・・・  
心臓が一気に高鳴ってしまうのは自然の摂理だ。

「熱はないみたいだけど・・・大丈夫?少し寝る?」

「いや……大丈夫です。……その……心配してくれて……  
ありがとうございます。」

ぎゅっと抱き合つ。

ほんわかとした温もりと、柔らかな体の感触が服越しに伝わつてくれる。

そして、ひとりだけでなく俺までもが胸騒ぎを起した。

「……普通では、ないな」

抱き合ひのをやめ、背を向けていた扉の方を見据える。  
何かが起こり始めている……いや、既に起こっている。

「啓祐さん……」

「とうあえず見に行いつ。お空とお燐が心配だ」

扉を開き、俺ひとりは走り出す。

これが残酷な未来へのカウントダウンといふことも知らずに。  
ただ、未来は自らが切り開くもの。

出会いがたくさんあるように、未来だってたくさん存在する。

突然の襲撃者。

幻想郷を守るべく立ち上がる巫女と魔法使いとスキマ妖怪。  
間欠泉地下センターに現る敵。

応戦する空と燐。

胸騒ぎを抱えながら駆けつける少年少女。姿を晦ましつつ、何かの機会を伺う少女。1人1人の思想、考えは違うかもしれない。ただ、その先にあるのは守るという思い。それぞれが立ち上がり、そして迎え撃つ。幻想郷での新たな異変が今始まった

## 第十二話 「死と絶望へのカウントダウン」（前書き）

オリ主の無双・・・も一瞬かもしれない。  
そろそろ話が動き出します。

第二章の中核に突入です。

## 第十二話 「死と絶望へのカウントダウン」

「つ・・・ちよこまか逃げるわね・・・」

「逃げ足だけが俺の取り柄なんでね。それは俺への褒め言葉かあ！」  
？

目に見えぬ物凄い速度で一本の刀を振り回す男。  
それをギリギリのところでかわし、隙をみて弾幕を放つの繰り返しだ。

「それで、蚊帳の外のあんたちは油断てかあ！？」

靈夢をその場に残し魔理沙と紫の下へ移動する男。  
移動と称してゐるが、その速度は瞬間移動にも劣らないほどだ。  
まるで氣を逸らしているかのように見える2人の下へ移動し

「あの世で恨むんだな、あの世でなあ！！」

目を逸らしている2人に向かつて刀を振り下ろす。

そこには無残な光景が広がる筈だった。

そう、2人は氣を逸らしているかのように”見せていただけ”

男の短気な性格を利用した初步的かつ単純な罠。

対峙して1時間すら経っていない、それなのに男の性格を見切つた  
その洞察力。

ハ雲紫、彼女の頭脳に勝る者はいないのかもしれない。

「己の性格に後悔しなさい。そう、あの世でね！..」

「今度はじつちの番だぜ！…さつきの仕返しだ…！」

魔理沙が笄の上に立ち、紫は一枚のカードを握る。同時に叫ぶそれはスペルオン。

「魍魎」「一重黒死蝶」…

「彗星」「ブレイジングスター」…

紫からは高密度かつ一重、赤い蝶弾と青の蝶弾が撃ち込まれる。容易に避ける」との出来ないそれは死への誘い。

魔理沙は彗星の如く笄に乗つて突撃する。

当たれば無傷では済まない。

致死性が無いスペルとはい、一つが同時に当たれば無傷では済まない。

更に後ろには博麗の巫女が構えているのだから。

「…………ベガモアモアモア」

不気味なその声は紛れもない、目の前の男から発された声。攻撃する2人の手を煩わせたが、止める」とはなく攻撃を続ける。それが罷だと知らずに。

「きはあああああー！馬鹿だなあお前ら……てめえりよりつも場数踏んでるんだよこつちはなあ！…」

刀を交差させて構える。

それはくるもの全てを拒絶するかのような構え。直後、漆黒の刃が赤く光りだす。

「・・・黒死」「赤光拒絶」

二重黒死蝶を跳ね除け、ブレイジングスターをいとも簡単に吹き飛ばす。

赤光拒絶・・・全てを拒絶する赤き閃光といったところか。しかし、彼女らが驚いたのはそこではない。

「スペルカード・・・ですって・・・」

スペルカードは博麗の巫女こと博麗靈夢が提唱した戦いの方法。人間と妖怪が対等に戦うための一つの戦法。そのスペルカードを外来人が使用する。そう、この男は外来人ではない。だとすれば元幻想郷の住人だというのか？

「わりいが・・・お前らにはここで死んでもらう。俺には成し遂げなければならないことがあってな。邪魔されるわけにはいかねえんだよ！！」

「さとりさん！お燐とお空は間欠泉地下センターだ！」

「間欠泉・・・まさか・・・」

さとりの不安は的中したらしい。走る速度は更に増していく。一刻を争う事態になつていてるらしい。

「啓祐さん！！私は先に行きます。そして・・・無茶だけはしないでください・・・！」

そう言ひてさとうは俺をおいて先に進む。

その場に残された俺は立ち尽くすだけだった。

・・・確かに、人間の俺が妖怪や能力者同士の戦いで役に立つだろうか。

役立つわけがない。むしろ足を引っ張るだけだ。

「・・・だからって」

この場で留まつていてもいいのか？

さとうさんが戦うかもしれないのに。

俺は傍観者となつてもいいのか？

「・・・嫌だ」

さとうさんを守ると誓つたんだ。

お燐にだつて言われた、泣かせたら承知しないと。

俺は傍観者では駄目なんだ。

「・・・くそったれ」

止まつっていた足を動かし始める。

先ほどまでとは比べ物にならない速度で。

俺は間欠泉地下センターへ走る、とにかく走る。

何が起こっているのか分からぬ。

俺の想像など容易く超えてしまふ事態なのかもしれない。

「（急げ・・・急げ・・・！）

それでも俺は走る。

縛れる足を必死に動かす。

さとり達のいる間欠泉地下センターへと。

「うにゅ？カードが使えない・・・」

お空の発動した・・・と思つたスペル。  
発動は空振りに終わり、そこにあるのはただの一枚のカードだけだ  
った。

「スペルカードというものは無効にしました。あなた達はそれがな  
ければ戦えないのでしょう？」

「あたい達はスペルだけで戦つてきたわけじゃないよ！！」

氷華の後方から弾幕を撃ち込む焼。

凄まじい数の弾幕は咄嗟で避けるものではなかつたのだが・・・

「・・・」こんなもの・・・甘い」

スウ と消えるその姿はまるでスキマを掻い潜つたかのよつ。  
2人が氷華の姿を探す中、それは突如として上空から舞い降りる。  
そして奇襲の如く機関銃を両手に構え・・・

「DEAD ENDです。あなた達の死体はきちんと埋葬してあげ

ますよ

機関銃から容赦なく弾丸が撃ち込まれる。

当たれば待ち受けるは死のみ。

機関銃の音に気付いたのは既に時遅し。

上空を向けば降りかかるは弾丸の雨。

「お空！…お燐！！」

その声に反応したのが吉だつたのか。

声の主の方へ咄嗟に横つ飛びをする空と燐。

ダダダダダンとその場に無数の弾丸が撃ち込まれる。

「…あなたですか。ここへ侵入したのは

「…悟りの妖怪…思つたよりも早く来たのは少し想定外」

構える機関銃を降ろし、少しの休戦を表す氷華。

さとりは目を閉じ、何かを悟るかのように集中力を高める。

「…！？みんな後ろに下がって…」

分けも分からずに後ろへ下がる空と燐。

さとりは驚いたような表情で氷華を見据える。

直後、さとり達のいた地面から無数の槍が飛び出した。

「…心を、読まれましたか

機関銃を捨て、今度は何かの結界を張る氷華。

その結界の一部、自身の心臓あたりだけを切り開く。

「言わば硝煙反応を防ぐような感じなんですねけどね。実際はそんなことはどうでもいいのです」

切り開いた結界に大きめのマシンガンをねじ込む。

その銃口が睨みつけるのはさとり達。

そう、次は逃がさないと言わんばかりに。

「心を読んでも無駄です。私が、何の策も無しに敵地に飛び込むとでも思いましたか？」

「・・・右、上と下・・・左！？全方向ですって！？」

先読みしてそれは無駄。

氷華が言いたかったのはそういうことだらう。

全方向から、更に隙間の無い攻撃。

誰がどうやってこれを避けるというのか。

「私と主人・・・成し遂げなければならぬと思いつがあるのです。邪魔する者は、容赦なく死へと葬ります」

さとり達のいるその場を囲むように槍が出現する。

しかし、それらが直接攻撃することはない。

彼女が、氷華が結界に捻じ込み向ける銃口が悲鳴を上げようとしている。

「私は負けない。たとえ何があろうと跪くわけにはいかない！－！」

引き金に指をかけ、それを自分の方へと引く。

そうすれば弾丸が撃ち込まれ、さとり達は容赦なくあの世行きとな

る。

絶体絶命、しかし、そんな言葉は存在しなかつた。

ドンツツ――

弾丸の射出される音。

それが響き、さとり達は槍に囲まれながら最期を迎える・・・こと  
はなかつた。

マシンガンは力なく地上へ落下する。

氷華の後ろ、そこには1人の人間がいた。

まだ幻想郷に来て間もない、惨めで力のないちつぽけな人間が。

「ふざけるなふざけるなふざけるな――死に葬り去る? ふざけんじ  
やねえよ――」

己の拳に力を籠め、まだ幼い少女を容赦なく殴る。

年齢なんて関係ない、愛する者を守る為なら相手が誰だらうと容赦  
しない。

拳に血が滲もうとも、少女が拳銃を盾にしようとした。

その拳は止まることを知らない。

「（何、何この人間!? 知らない・・・こんな私の想定外・・・  
!――）」

殴られながらも分析を続ける。

ただの人間が、人間風情がどうして私に攻撃できるのか。  
いや、そもそもどうやって結界を掻い潜つたのか。  
この結界が人間如きに破られる筈がない。

ズゴンツツ――

その一撃は無残にも顔面にめり込んだ。

少女は力なく落下する。

そして、人間の乗っていた何かも崩れ落ちる。

「啓祐さん……」

落下する啓祐を咄嗟に受け止めるセトツ。

ぐつたりと横たわる少女は空と燐が押さえている。

「……セトツさん。無事でよかつた」

「何で……何で無茶するのですか!! 私は無茶しないでと言った  
筈です!!」

涙ぐむセトツを横目にすっと立ち上がる啓祐。

その瞳には倒れる少女でも、地靈殿でもなかった。

何故か地上を見据えている。

そう、まるで地上で何が起こっているのか分かつていてるみたい。

「セトツさん」

啓祐は小さく呟く。

自分に何が出来るのか、分からない。

自分に何があるのか、分からない。

それでも悩む自分に終止符を打つ。

そして、血ひ絶望の淵へと足を踏み入れる。

「地上へ……連れて行ってください」

第十四話 「狂つ者達、そして静寂は訪れる」（前書き）

残酷描写が有ります、「注意ください」

## 第十四話 「狂う者達、そして静寂は訪れる」

地上にはお札が散らばり、箒が投げ出され……  
圧倒的な男を前に、靈夢と魔理沙は倒れる以外に選択肢が無かつた。  
幻想郷最強とまで謳われたあの巫女が、  
数々の異変を靈夢と共に解決してきたあの魔法使いが、  
男を前にいとも容易く倒された。  
男を前にいとも容易く倒された。  
この事実が覆されることはない。

「…………口だけか……結局、俺に勝てる奴なんていねえんだよな……」

哀れみの目で横たわる2人を見る男。

その男に最早紫ですら防御するので精一杯だった。  
賢者とまで謳われる紫が防戦一方。

男の力量がどれほどか……はつきりと表れている。

「しかしだ、ここまで倒れなかつたのは珍しいな。俺相手に10分  
間も倒れないとは」

「そんな屁理屈……いつまでぼやべりどが出来るかしらね……」

男を睨む紫、その表情からは疲れも見え始めている。

弾幕結界で男を追い詰め、境界を利用して奇襲をかける。

そんな理屈を無視した戦法を用いたにも関わらず、男はケロッとした態度を続けている。

そう、攻撃が一発たりとも当たらないのだ。

「その言葉、そのままにして返す。お前は後何秒耐えられるんだあ

！？

無数の漆黒の刃が光輝く。

まるで結界のように、その刃は紫を囲む。逃げ場がないように見えるが、紫はスキマを駆使して攻撃を回避するのだった。

そう、最初だけ・・・・・・

「てめえの戦法は丸分かりなんだよ。スキマなんざ子供魂なもの！」

何も無い虚空へ刃を放つ男。

何も無い・・・本当にそつだつたのか。

スウ と表れた空間の亀裂へと・・・・・！

「！？」

大きく目を見開く紫。

そして、スキマすら使う間も無く、紫は地上へと落下する。

無数の刃を浴びながら、止まることのない鮮血をばら撒きながら。ハ雲紫がやられた。

それは幻想郷を搖るがす事態と言つても過言では無い。

もつとも、この男が侵入した時点で搖るがす事態なのだが。

「11分・・・最高記録だハ雲紫。その栄誉を称えて最高の死をプレゼントしよう！」

無数に散らばる漆黒の刃は一つの巨大な刃へと姿を変貌させる。

それは死への誘い、回避することの出来ぬ死への誘い。

漆黒の刃が赤く染め上げられるのか・・・

「これで俺の目的は成し遂げられる。最大の壁を潰せたのだから」

男の言う最大・・・それは蟻の如くちっぽけなものだったのかかもしれない。

そう、男と共に侵入した氷華が倒されたとは知らずに。

「想起」「一重黒死蝶」！！」

男は目を見開く。

あの倒れた筈の八雲紫のスペルが発動されたのだから。

地上で倒れる紫を見る。

しかし、ぐつたりと倒れた彼女がスペルを発動させたとは思えない。そう、想起というワードをきちんと聞いておけばすぐに分かったこと。

流石の男でも無防備なその身に攻撃を受けければ大ダメージとなる。

「んぐっつ・・・！」

背中から無数の弾幕を浴びせられ地上へ落下する男。

寸前のところで体制を整えたものの、紫のスペルを受けた男はかなりのダメージを負った筈。

「何者だ・・・俺の邪魔をする糞野郎！！」

ギッと睨む男。

その視線の先には紫髪の少女がいた。

怨霊も恐れ怯む少女、古明地さとり。

「即刻死刑だ糞野郎！！5秒での世に葬り去つ

男の言葉が途切れる。

単に詰まつただけなのかもしけない。

しかし、男の後ろを見ればすぐに分かる。

そして、この侵入者の特徴も分かつてき気がある。

「誰が糞野郎だつて？ふざけるな！」

そこには哀れな人間などいなかつた。

男は狂つたように発狂する。

「5秒なんて撤回だ。瞬殺してやる!! 決別「黒の誘い」!!」

この世と決別しろ、そつ言わんばかりに無数の漆黒の刃がさとりに向けられる。

## 黒 即ち死への誘い。

それは殺すには申し分の無いスペル。

「俺の心を読む? やめとけ、俺に心なんてないんだよ」

さとりが一瞬震える。

その一瞬の隙が死に近づく。

男の放つた刃は容赦なくさとりを襲う。

襲う、のだが・・・・・

「・・・・・本当に、足引っ張るな・・・俺は・・・」

男の後ろにいた筈。  
なのにどうして？  
それは簡単なことだ。

「はつ・・・・ははは！－愉快だ愉快！－」

男は笑う。  
男に不可能は無い。  
さとりの前に倒れる啓祐。  
そう、男が自ら飛ばした、移動させた。

「けい・・・すけさん・・・？」

ぐつたりと倒れる啓祐に手を当てるさとり。  
その手にはべつとりと赤い液体がこびり付く。  
啓祐の血、紛れもない鮮血。

「無様だ。人間はやはり無様だ！！脆い、脆すぎるわ！－」

男は笑う。

愉快な甲高い声で笑う。

全身を真っ赤に染めながらぐつたりとする人間を前にして。  
非情な男はとにかく笑った。

啓祐の傍で怒り狂う少女に気付かずに・・・

「・・・・・」

その瞳に映るのは赤い啓祐。

「…………す

その瞳に映るのは笑う男。

「…………るす」

その胸に宿るは我を消し去る殺意。

「殺す、殺す殺す殺す！－！」

血走る瞳、怒り狂う少女。

拳は震え、一步一歩が重く、切なく。

男は更に笑う、愉快だと言わんばかりに笑う。それも最期。

「怒れ怒れ！－！それでこそ楽しいんだよ！－！なあ！？もっと怒れ！－！そして俺を楽しませ

男の姿はそこにはない。  
あるのは怒り狂う少女。

「啓祐さんを……この野郎ツツ！－！」

それは人間、古明地さとりではない。  
妖怪としての古明地さとり。  
妖怪が故に持ち合わせる力。  
人間を遥かに超越する力。

「死ね肩野郎ツツ！！」

男が抵抗する余地は無い。

八雲紫をも倒した男に守る術は無い。

あるのはただひたすら死を待つ時間のみ。

「死ね！死ね！！」一度と表れるな！！消えろ！！消え去れ！！」

少女の面影は無く、あるのは怒りに我を忘れた悟りの妖怪。その手には血がこびり付く。それでも構わない。

フリルのついた可愛らしい服に血が飛び散る。それでも構わない。この姿を見て啓祐はどう思うだろう？ それでも構わない。

彼女に理性の壁といふ物は最早存在しなかつた

渾身の一撃が男の顔面をへしやける。

陥没した顔面から言葉が發されることは無い  
静寂が戻つたその地に守む1人の少女。

「啓祐さん・・・啓祐さんーー！」

泣き喚く少女。

そこには温かい心を持つた古明地さとりがいた。

1人の人間を心底愛し、共に過ごしてきたさとりがいた。

泣き喫き、地面に崩れる。

土を赤く染め上げた啓祐から皿葉が出ることはないのかもしねない。

それでもさとりは叫び続ける。

自身の愛した、生涯で唯一愛した彼の為に。

「啓祐さん！－！啓祐さん！－！」けいす

「つるせーよ妖怪風情。こいつら痛くて仕方がねえんだ」

真横へ殴り飛ばされる。

微々たる血を流しているものの、そこにはそれなりに殴り飛ばされただけだ。

された男が立っていた。

どういう理屈かは分からぬ。

しかし、男はそこに立っている。

「つたぐ・・・氷華はやられたみたいだし・・・」

男の傍にはさとり達が倒した筈の少女が横たわっていた。  
何が起こったのか、男以外で知る者は誰もいない。

「陥没骨折にその他もろもろ・・・結構な大怪我だぜ？」

にやりと口元が歪みだす。

不気味なその表情に募るのは愉快な殺意。

俺をここまでやつたのは初めてだと称えんばかりに。

「予定変更だ。今日ここに行つ

男が地面に刃を差し込む。

それは幻想郷崩壊への時限爆弾。

崩壊への引き金が引かれる合図。

最早逃げる術はない、回避する術もない。

ここにいなくとも、誰でも分かることだらう。

「消え去れ幻想郷。もつとも、元々幻想に過ぎない世界なん

「知ってるか？人間には火事場の底力って便利なものがあるんだよ」

男が持つ刀、その刃を素手で掴む人間。

その拳からは無数の血が流れ落ちる。

それでも人間はやめない。

田口啓祐は命を投げ捨てるかのように叫ぶ。

「てめえが何をしたいのか知らねえ。ましてや過去に何があったのかなんて知るわけもない」

とにかく叫ぶ。

自分でも分からぬ、けれど、叫び続ける。

「逃げてるだけじゃねえか。お前は現実から逃げてるだけじゃねえのかよ！？」

自分でつて逃げてた。

両親の死という現実から目を背けてた。

常に孤独に生きてきた。

それはただ現実から逃げる弱い人間として。

「・・・逃げるなよ。今この現実から逃げるなよ！！」

俺が言ったところで果たして説得力があるのだろうか？

未だに現実と立ち向かう」との出来ていらない俺が言ったところで意味があるのだろうか？

「俺はここに来れて幸せだ。せひちゃんと出会えて物凄く幸せだ！」

何を言つてゐるのか分からぬ。

男も女性の分からないと言わんばかりの表情をしている

「そんな世界、この幻想郷を壊すつていうのなら・・・」

信じられないほどのが拳に籠められる。

信じられないと言わんばかりの表情の男に拳を突き出す。

拳は男の顔面にめり込む。

男は抵抗をしない。

卷之三

男は笑う。

狂った笑みではなく、1人の男ととしての笑み。

「面白い人間は・・・」

倒れる男はそう呟く。

目の前にいる1人の人間に對して。

「今日は手を引かせてもらつよ。でも・・・次はそつはいかない」

ゆつくりと姿が消え去る男は続ける。

「俺にだつて成し遂げなければならぬことがある。次は・・・容赦しねえ」

そう言い残し男は消えた。

倒れていた少女の姿も同時に無くなっている。

「・・・・・」

男のいた場所を眺めつつ、啓祐はゆつくりとその場に倒れる。だらだらと血が流れ、その拳は刃によつてずたずたになっていた。何があつたのか、それはこの場にいる者にしか分からぬだろう。一瞬であつたものの、幻想郷には再び静寂が訪れた。

## 第十五話 「眞実」

「ここはとある竹林に建てられた診療所。幻想郷一の名医がいるその診療所は大層人気があるらしい。なんでもその医者の作る薬はどんな病気にでも効くとかなんとか……」

「……実に暇だ」

俺は今その診療所にいる。

正確に言えば連れてこられた。

そして目が覚めればここで横たわっていたといつ。

まあ……理由は分からなくもないが。

そして、俺の寝転がるベッドに座る1人の少女。紫色の髪、可愛らしいフリルのついた服。紛れも無い、古明地さとりだ。

「……ずっといるけど大丈夫なのか？少しは帰った方がいいと思うけど」

「いいんです。私がしたいようにさせたださー

と、一点張りで帰ろうとしない。

いや、俺だっていてくれることに関しては素直に嬉しいさ。

けれど一度くらいは顔を出した方がいいと思う。

地霊殿ではこいし達が待っているだろうし……

「啓祐さん……」

天井をボーと眺めている俺の視界にさとりが現れる。  
突然のこと驚いたものの、すぐに俺は桃色の世界に足を踏み入れる。

「ん、・・・」

温かく、柔らかい唇が重なり合つ。

暫くその状態から動かず、時々舌を絡め合つ。  
しかし、そんな時も束の間。

「・・・・・甘い時を邪魔して申し訳ないのだけれど」

扉の方から聞こえた声に大層驚く俺とさとり。  
そこにはやれやれと呆れ顔の名医が立っていた。  
八意永琳、ここ永遠亭の名医だ。

そんな永琳でさえ呆れるのだから、俺達は第三者視点だとどういう  
感じなのだろうか・・・  
分かるのは特定の人物達からふるぼつこにされるということぐらい  
か・・・

「体の調子はどうかしら? 運ばれてきたときは驚いたけど・・・人  
間にしては中々の治癒力と生命力ね」

「ははっ・・・・・火事場の底力ってやつですよ。人間の特権で  
す」

冗談交じりに笑い合う俺と永琳。

どうも俺はこの人に傷を塞いでもらつたらしい。  
命の恩人がまた増えてしまった。

「そりそり、さとりさんね、少し来てくれるかしら?」

永琳に呼ばれて着いていくさとり。

俺のいる病室に束の間の静寂が訪れた。

そう、束の間・・・

「・・・・・ふふっ」

「結論から言わせてもらひつわ」

永琳の口からとんでもない事実が述べられる。  
それはさとりも、そして言い放った永琳でさえも信じられない事だ  
った。

「と、いつことは・・・啓祐さんは・・・」

「ええ、確かに人間なのは事実だわ。でも・・・そこに何かが混じ  
つている」

「・・・今までに無い種ですか・・・」

本人には無断で血液サンプルを探らせてもらつた。  
それを検査してみれば驚くべき事実が浮かび上がつた。

人間である筈の彼に見たことのない成分が含まれていたこと。

簡易的な検査では分からぬが、今後の検査や実験を踏まえれば実  
態が明らかになるかもしねり。

「でも安心して。彼は変に暴走したりすることはないわ。今まで通り桃色世界を楽しんで頂戴ね」

「口うと笑う彼女の笑みに対し、苦笑いと一種の寒気を感じる」とり。

診察室を出て啓祐の下へ向かう。

・・・彼は彼だ。何があろうと啓祐なんだ。

静かな病室は時の流れを遅く感じさせる。  
窓から見える景色は竹藪・・・実に暇だ。

「暇なら私の遊び相手になつてよ」

暇といつのは撤回する。

そう、俺はベッドに寝ているわけでは無く座っている。  
この兎の妖怪、因幡てるの遊びに付き合わされている。  
遊びと言つても彼女の悪戯に付き合つているだけなのだが・・・

「あんた人間なんでしょう？何でここに来たの？」

「・・・・・・守る為だよ。それに、俺はあつちにいても何もない  
からね」

窓の外を眺めながら呟く。  
てゐは俺の話に飽きたのか病室を出て行つた。

入れ違いでさとりが戻ってきた。

その顔は何やら不安を抱えているようだった。

「セヒツセン？」

名前を呼ぶも返事がない。

俯いたままの表情は俺からは見えない。

何を思つているのか、まったくして分からぬ。

「啓祐さんは・・・」

小さく、俺の名を呼ぶさとつ。

何を思つたのか、バツといひひひと視線を合わせ、

「啓祐さんは・・・何があつてもずっと一緒にいてくれるんですよ  
ね!？」

何を言い出すかと思えばそういうことだ。

しかも涙目で・・・一体何があつた?

永琳はせとつに何を言つたんだ?

「私は・・・もつ啓祐さんがいないと生きれないんですよーーー。」

言つてゐる意味が分かるようで分からぬ。

いや、話の意味は分かる。

分からぬのは何故このタイミングでさとりが言い出すかだ。

その口調はあるで怒つてゐるよつて、ビリか苦しみでこらゆつて。

「セヒツセン・・・いつかに来て

さとりがゆつくつとこちらへ歩み寄る。

俺の前まで来て体制を崩す。

そして俺の胸に倒れこんだ。

「何があつたか分からなければ、俺は言つたらへずつと傍にいるつて」

優しく頭を撫でてやる。

俺の服にさとりの涙が染み込み、涙染みになつていぐ。

氣にせずぎゅっと抱きしめると一層泣き出しそうだ。

「やつわい、やとわい」

「はい・・・・・何でしょい・・・・

俺はさとりの頭を撫でながらこいつ言った。

それはさとり自身を凍りつかせる一言だった。

「俺に人間以外の血が流れてもうこと・・・他言しないようにね

ここは幻想郷・・・の人間たちが住みかう町、人間の里。  
町並みは日本の過去、江戸時代みたいな感じだと思つてくれればいい。

ここには寺子屋や酒場、果てはお嬢様の豪邸が存在する。  
そしてここは寺子屋、子供達が勉学に励む言わば学校。

「今日の授業はここまでだ。各自宿題と自主勉強を怠らないことよつて。  
起立！」

教壇に立つ白髪の教師が号令をかける。  
子供達は一斉に立ち上がり、さよならの合図と共に教室を出していく。

走つて出ていく者、教科書をかばんにつめて出ていく者など。  
皆が教室を出ていくのを見届け、教師も出てこようとした。

「お仕事お疲れ様。今晚一杯やらない？」

これまた白髪の少女が扉にもたれながらひそかに話しかける。  
藤原妹紅、竹林に住む少女だ。

度々人里に来ては私と酒を交わす親友でもある。

「これでも私は教師だ。翌日授業を控えているのに酒は飲めない」

堅そうな性格をしているのは上白沢慧音。  
人里の寺子屋で教師をしている。

「そんなこと言わずにさ、軽く一杯だけでも・・・ね？」

「む・・・一杯だけなら・・・仕方がないな」

そつとつておいて酔い潰れるまで飲むのが定番になりつつある。  
翌日の授業を休んだり遅れたりしたことは一度も無いが。

「そうそう、慧音は聞いた？」

「何をだ？」

妹紅が一つの新聞を見せてくる。

博麗の巫女、大怪我で暫く休養

白黒の魔法使い、戦闘で自らの力量に嘆く

スキマ妖怪、大怪我の為大結界の管理を式神に代行させる

どれもこれも信じがたい内容だった。

あの博麗の巫女が大怪我をし、スキマ妖怪までもが大怪我。

幻想郷を搖るがす事実としては申し分の無い出来事だ。

「それよりここも見てよ」

妹紅の指差す部分には不可解なことが書かれていた。

どうやら数日前に幻想郷に侵入者がいたらしい。

それを退治する際に先ほどの3人は大怪我を負つたらしい、のだが・

新たに幻想郷へやつて来た人間、侵入者を素手で撃退

これもまた驚くニュースだ。

人間が幻想郷に侵入するほどの敵を撃退するのだから。しかも素手で。

「これは面白いことになりそうじゃない？」

妹紅が楽しそうに目を輝かせる。

対して慧音は不安そうな表情を隠し切れなかつた。

「人里に危害が及ばなければいいのだが・・・」

人里は人間の住みかう町。

慧音や妹紅がいるのでそう易々と襲われる心配は無い。  
しかし、いつ脅威が現れるか分からぬ。

それはこの人間に對してもそうだ。

そんな不安を募らせる慧音に妹紅はこいつ言ひ。

「大丈夫だよ慧音。相手が人間ならそれなりに接する。教師たる慧音がそんなんじゃ生徒が困惑するぞ？」

「む・・・確かにそうだな。相手が普通に接するなら私もそんじようう」

開いていた新聞を閉じ妹紅に返す。

慧音は教卓に乗せてある名簿を抱え教室を出る。

誰もいなくなつた教室には当たり前のように静寂が訪れ、緩やかな時を流す。

「（・・・人間、か）」

廊下の天井をボーと眺めながら慧音は心中で呟く。  
不思議な人間・・・一度会つてみたいものだ。

第一  
章

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1976ba/>

---

光射す方へ・・・【東方小説】

2012年1月8日21時45分発行